

仙台市文化財調査報告書第154集

燕 沢 遺 跡

第4・5・6次発掘調査報告書

1991年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第154集

燕 沢 遺 跡

第4・5・6次発掘調査報告書

1991年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

燕沢遺跡は、古くから縄文土器や古代の瓦が出土するところとして知られており、これまでの調査では、古代の何らかの国家的施設が存在する可能性を秘めた、重要な遺跡であることが報告されております。

燕沢遺跡は、陸奥国分寺や多賀城へ供給するための古代瓦窯跡群が存在する台ノ原・小田原丘陵の先端部に位置し、周辺には千人塚古墳・善応寺横穴古墳群や比丘尼坂・蒙古の碑などが所在し、古代から中世にかけての歴史を物語る地域でもあります。

かつては自然豊かな丘陵地帯であった燕沢遺跡も、現在は都市化が進行し、周辺の遺跡とともに住宅地に囲まれ、かつての風景は失なわれつつあるようです。

今回の報告は、燕沢遺跡の4～6次調査の成果をまとめたものであります。発掘調査から報告書作成の間、ご協力をいただきました地元の皆様に対し、ここに心から感謝の意を表しますとともに、本書が燕沢遺跡、また考古学研究の一助となれば幸いります。

1991年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例　　言

- 本書は、擁壁工事等に伴う燕沢遺跡の第4・5・6次発掘調査報告書である。
- 本書の作成執筆は、田中則和・佐藤好一・工藤信一郎が担当し、全体の編集は工藤が行った。執筆分担は下記の通りである。

第I章	遺跡の位置と環境	佐藤好一
第II章	調査に至る経過	田中則和・工藤信一郎
第III章	4次調査	田中則和
第IV章	5次調査	工藤信一郎
第V章	6次調査	田中則和
- 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の機関・方々に指導・助言・協力を賜った。(順不同・敬称略)
〈機関〉東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所
〈個人〉藤沼邦彦・進藤秋輝・高野芳宏・加藤道雄・丹羽茂
- 本報告書中の土色については、「新版標準土色帳」(小山・竹原:1973)を使用した。
- 本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1:25000「仙台市東北部」を使用した。
- 実測図中の水系高は標高で示している。
- 実測図中の方位は磁北に統一してある。仙台市において磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
- 本書で使用した造構略号は次の通りである。
SB:建物 SD:溝 SI:豊穴(住居) SK:土坑(土壙) P:ピット
- 5・6次調査において、出土した瓦の分類については、これまでの燕沢遺跡発掘調査報告書の分類基準にしたがっているが、ここにあらためて分類基準を掲げておく。
平瓦1類……凸面に格子叩き目がみられる。斜格子1a類・正格子1b類・斜格子+正格子1c類に細分される。
2類……凸面に平行叩き目がみられる。
3類……凸面全体にヘラケズリないしはナデ調整が施される。叩き圧痕は不明。
4類……凸面に繩叩き目がみられる。
5類……凸面に繩叩き目がみられ、ナデ調整により一部叩き目が磨り消される。
丸瓦1類……凸面に格子叩き目がみられる。
2類……凸面に平行叩き目がみられる。
3類……凸面にナデ調整が施される。叩き圧痕は不明。

4類……凸面に繩叩き目がみられる。

10. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真は、仙台市教育委員会文化財課で保管している。

調査要項

遺跡名称 燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号 C-101）

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局社会教育部文化財課調査係

	4次調査	5次調査	6次調査
調査地	宮城野区燕沢東三丁目 523-1	宮城野区燕沢東三丁目 512-1	宮城野区燕沢東三丁目 506-1他
担当職員	田中則和	佐藤好一・工藤信一郎	田中則和・工藤信一郎
調査期間	1989年11月8日(試掘調査) 〃 11月29日～12月9日	1990年8月30日～9月18日	1990年12月5日～12月11日
開発面積	2,299 m ²	948 m ²	1,137 m ²
調査面積	338 m ²	300 m ²	105 m ²
原因者	有限会社丸三ビル	株式会社台の原不動産	山田清一
調査協力	株式会社東洋開発コンサルタント	株式会社東洋開発コンサルタント	株式会社日東建設 株式会社青野測量設計
参加者	有限会社太仲興業	佐々木 匡 横田 正治 熊谷 友治 加藤 久 佐藤 久 村山よし子 田中つや子 斎藤 康子 小泉 幸子 本間 春美 高橋 喜子 塩野 礼子 掘籠 幸子 筒井 尚美 昆 イヨ 須藤 敬子	佐々木 匡 横田 正治 熊谷 友治 加藤 久 佐藤 久 朝沢美佐子 斎藤 康子

本文目次

I. 遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
II. 調査に至る経過	1
1. 4次調査	1
2. 5次調査	3
3. 6次調査	3
III. 4次調査	5
1. 調査方法	5
2. 基本層序	5
3. 検出遺構と遺物	6
(1) SI1 積穴住居跡	6
(2) SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡	8
(3) ピット群	14
① 第1柱穴列	14
② 第2柱穴列	14
③ 第3柱穴列	14
(4) 溝状遺構	14
① SD1 溝状遺構	14
② SD2 溝状遺構	15
IV. 5次調査	16
1. 調査方法	16
2. 基本層序	16
3. 検出遺構と遺物	18
(1) 積穴住居跡	18
① SI1 積穴住居跡	19
② SI2 積穴住居跡	19
(2) 土坑	20
① SK1 土坑	20
② SK2 土坑	23
③ SK3 土坑	24
④ SK4 土坑	24
⑤ SK5 土坑	24
(3) 溝・溝状遺構	24
(4) ピット群	25
(5) 階段状段差	25
4. 遺構外の出土遺物・瓦	25
5. 出土遺物（土師器）について	27
V. 6次調査	28
1. 調査方法	28

2. 基本層序	28
3. 検出遺構と遺物	28
(1) SD1 溝状遺構	29
(2) SK1 土坑	31
(3) SK2 土坑	32
(4) ピット	33
(5) 烧面と竪穴住居跡の可能性	33
VI. 4～6次調査の考察とまとめ	33

挿図目次

図 1 薙沢遺跡と周辺の遺跡	2	図 16 SK1 土坑	20
図 2 調査区位置図	4	図 17 SK1 土坑出土遺物	21
図 3 4次調査トレンチ配置図	5	図 18 SK1 土坑出土瓦	22
図 4 第3・4トレンチ遺構配置図	6	図 19 SK2 土坑・出土遺物	23
図 5 SI1 竪穴住居跡出土遺物	7	図 20 SK3 土坑	24
図 6 SI1 竪穴住居跡	7	図 21 SK4・5 土坑	24
図 7 SI1 竪穴住居跡埋設瓦	9	図 22 SD2 溝出土瓦・SD5 溝出土遺物	25
図 8 SX1 平場・SB1 振立柱建物跡	10	図 23 遺構外出土瓦	26
図 9 SX1 平場・SB1 振立柱建物跡出土瓦(1)	11	図 24 6次調査遺構配置図	29
図 10 SX1 平場・SB1 振立柱建物跡出土瓦(2)・土器	12	図 25 SK1 土坑出土・土玉	30
		図 26 SD1 溝状遺構・SK1 土坑・ピット(I 区)	30
図 11 SX1 平場・SB1 振立柱建物跡出土瓦(3)	13	図 27 SD1 溝他出土瓦	31
図 12 基本層序(5次調査)	16	図 28 SK2 土坑	31
図 13 5次調査遺構配置図	17	図 29 SD2 溝出土遺物	32
図 14 SI1 竪穴住居跡・出土遺物	18	図 30 その他の遺構	32
図 15 SI2 竪穴住居跡	19		

表目次

第1表 薙沢遺跡層別調査成果一覧表	3	第3表 5次調査溝・溝状遺構観察表	25
第2表 4次調査出土瓦観察表	15	第4表 6次調査溝状遺構観察表	33

写 真 目 次

写真-1	燕沢遺跡航空写真（昭和36年）	38	写真-18	SX1 平場・SB1 堀立柱建物跡出土瓦	45
写真-2	燕沢遺跡航空写真（平成2年）		写真-19	4次調査出土遺物土師器・鉄製品	46
写真-3	4次調査区遠景（調査前状況）	39	写真-20	5次調査区遠景（南西から）	47
写真-4	4次調査区近景（調査前状況）		写真-21	調査区全景（東から）	
写真-5	SI1 壺穴住居跡		写真-22	調査区全景（西から）	
写真-6	SI1 壺穴住居跡瓦堆設部	40	写真-23	SI1 壺穴住居跡	48
写真-7	SI1 壺穴住居跡光掘状況		写真-24	SI2 壺穴住居跡	
写真-8	SI1 壺穴住居内土師器焼埋設部		写真-25	SK1 土坑土師器坏出土状況	
写真-9	SI1 壺穴住居跡・煙道	41	写真-26	SK1 土坑完掘状況	49
写真-10	SI1 作業風景		写真-27	SK2 土坑	
写真-11	SB1 堀立柱建物跡・SX1 平場		写真-28	SK2 土坑土師器坏出土状況	
写真-12	SB1 堀立柱建物跡		写真-29	SK1 土坑出土瓦	50
写真-13	SB1 堀立柱建物跡	42	写真-30	5次調査遺構外出土瓦	51
写真-14	SX1 平場瓦出土状況		写真-31	SK1 土坑出土遺物	52
写真-15	SX1 平場柱穴		写真-32	5・6次調査出土遺物	53
写真-16	4次調査 SI1 壺穴住居跡埋設瓦	43	写真-33	6次調査 SD1 溝・ピット検出状況	54
写真-17	SI1 壺穴住居跡埋設瓦・SX1 平場・SB1 堀立柱建物跡出土瓦	44	写真-34	SD1 溝・ピット完掘状況	
			写真-35	壺穴住居跡	

I. 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

燕沢遺跡は、東北本線東仙台駅の北東約2kmの地点、仙台市宮城野区燕沢東三丁目・同区岩切字山崎西に所在する。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山脈から東に分岐する富谷・七北田丘陵（仙台市北部では台原・小田原丘陵の呼称がある）の間を七北田川が東流し、太平洋に注いでいる。七北田川の上・中流域の両岸には河岸段丘や自然堤防・後背湿地が発達している。

本遺跡は、台原・小田原丘陵の東端部、七北田川右岸の標高20~30m程の河岸段丘上に立地している。沖積地との比高差は10~20m程ある。

2. 歴史的環境

燕沢遺跡周辺には、数多くの遺跡が分布している。特に七北田川両岸の段丘上や自然堤防上に集中している。

縄文時代・弥生時代の遺跡については不明な点が多いが、古墳時代以降には数多く形成されるようになる。自然堤防上には鴻ノ巣遺跡・岩切畠中遺跡・新田遺跡のような集落が営まれ、丘陵部には千人塚古墳や、善應寺・東光寺・入生沢・台屋敷の横穴墓群が造営される。また遺跡の南西約2kmにある大蓮寺窯跡では初期須恵器の生産が行なわれている。

奈良時代になると当遺跡の東北東約5kmに多賀城が、つづいて南南西約5kmに陸奥国分寺・同尼寺が建立される。これらに供給される瓦・須恵器等の生産が台ノ原・小田原丘陵上で開始され、県内でも有数の古代窯業地帯となった。本遺跡は、戦前石田茂作氏によって燕沢寺として紹介され、その後古代の寺院や官衙としての性格について論じられてきている。

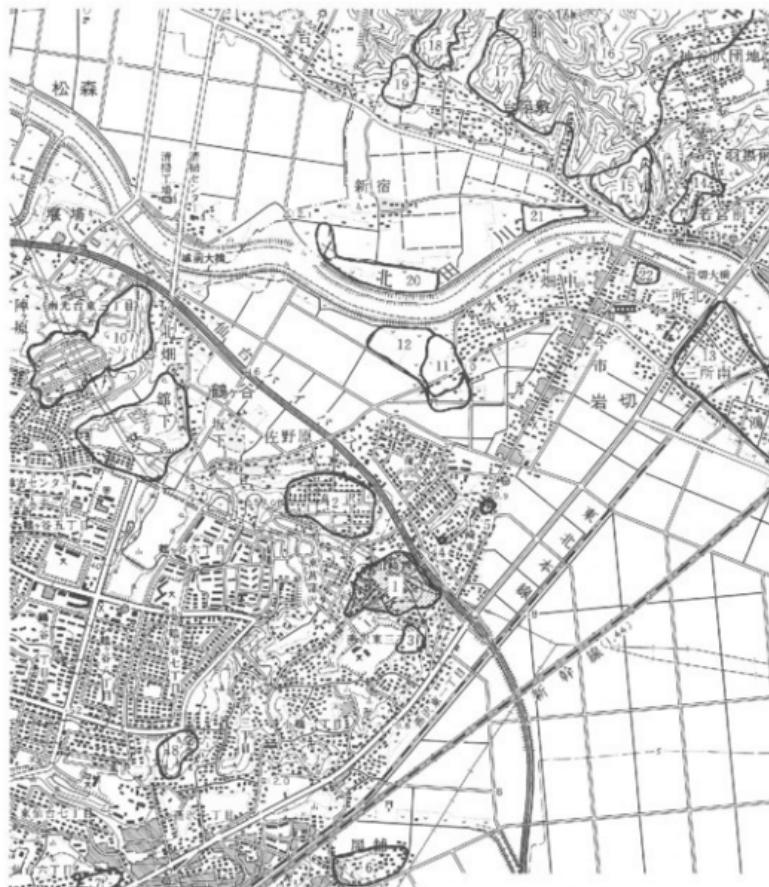
中世には七北田川左岸丘陵上に岩切城が留守氏によって築かれ、麓の留守氏菩提寺である東光寺には磨崖仏や多數の板碑が造立された。その他周辺には笹森城跡・小鶴城跡などの館跡がいくつかある。留守文書からもこの周辺が中世の中心地であったことがうかがわれる。

II. 調査に至る経過

1. 4次調査

平成元年10月2日付で有限会社丸三ビル代表取締役鈴木竹治氏より燕沢遺跡の発掘届が提出された。開発内容は宅地造成であり盛土主体の工事であるが、擁壁設置区域については遺跡破壊の懼れがあると判断された。

当該地の現状は近年の造成による高さ70cm前後の段が東西方向に形成されており、遺跡が



No.	遺跡名	場所	立地	時代	No.	遺跡名	場所	立地	時代
1	高井戸塚	寺町7番地	丘陵	縄文～平安	12	御領原十連墳	菜落谷	自然堤防	縄文～平安
2	西芦洲塚	新布地	丘陵	平安	13	篠ノ島遺跡	篠布地	自然堤防	古墳・平安・中世
3	吉沢塚	武藏地	丘陵	平安	14	古谷前遺跡	古谷地	丘陵	縄文～平安・中世
4	小人塚古墳	川裏	丘陵斜面	古墳	15	東光寺跡六盤	板六基	丘陵斜面	古墳
5	山崎四連塚	新布地	丘陵	縄文	16	若竹塚	篠館	丘陵	平安
6	小篠塚	城壁	丘陵	平安	17	白蛇塚	板六基	丘陵斜面	古墳
7	大篠塚	篠跡	丘陵斜面	古墳・唐良	18	入金沢塚六盤	板六基	丘陵	古墳・平安
8	櫛田小盤六盤	櫛田墓	丘陵斜面	古墳～平安	19	入金沢遺跡	新布地	丘陵	平安
9	笠森塚	篠原	丘陵	平安	20	大芝園遺跡	新布地	自然堤防	平安
10	北林塚	新田町	丘陵山林	縄文～平安	21	新宿四連塚	新布地	自然堤防	平安
11	猪籠塚	猪籠	自然堤防	平安	22	今市遺跡	新布地	自然堤防	平安・中世

図1 猿澤遺跡と周辺の遺跡

すでに相当、損壊されている可能性が認められた。このため平成元年11月8日に確認調査を実施した。その結果、柱穴を含むピット10個、溝状遺構2基、性格不明遺構1基を確認し、本調査を実施することとした。

2. 第5次調査

本遺跡内の仙台市宮城野区燕沢東3丁目512-1番地において宅地造成が計画され、平成元年6月8日付で台の原不動産株式会社から発掘届が提出された。申請地は第4次調査地点に隣接し、堅穴住居等の遺構の存在が予想されたため、平成2年8月27日～9月18日まで、記録保存を目的とした発掘調査を実施するに至った。

3. 6次調査

平成元年11月16日付仙台市宮城野区岩切1丁目7番13号山田清一氏より燕沢遺跡の発掘届が提出された。開発内容は宅地造成であり、申請者との協議を経て盛土主体の工事となった。しかし車乗入口及び市道拡幅部については掘削はまぬがれず、遺構が破壊される恐れがあると判断された。このため発掘調査を実施することとした。

第一表 薩泥遺跡次數別調查成果一覽表

文献1. 石田茂作「仏教の初期文化」岩波講座「日本歴史」1934

2. 伊東信雄「燕澤古瓦出土地」「仙台市史3」1950。

¹¹ 「燕沢古瓦出土遺跡」「仙台の文化財」宝文堂 1970.

3. 仙台市教育委员会 第39集 薩泥遺跡(宇都造成)

4 仙台市教育委员会 第62集 蔡羽遺跡（仙台市山形東土地区西野町東當）

5 仙台市教育委员会 第116集 莺泥遺跡（施勝工事）

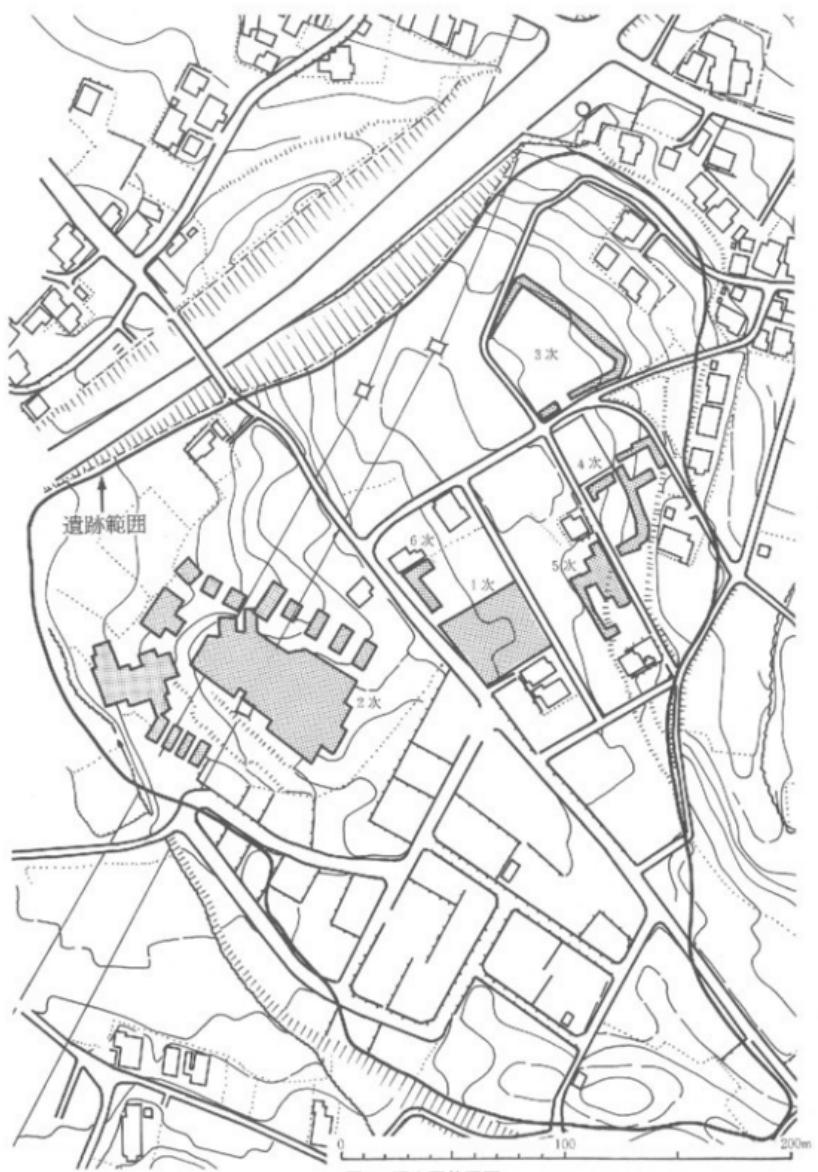


図2 調査区位置図

III. 4次調査

1. 調査方法

造構の破壊が予想される擁壁設置域に幅約3.5mのトレンチを設定した。測量は平板測量によった。

2. 基本層序

調査地は沢に面する南斜面に位置する。現在の標高は22~30mである。下方の平坦地(元来は沢地)の標高は16~18mである。調査区位置での等高線に直交した断面での傾斜角は15°前後である。調査区最下部を除く大部分の上層は表土(畠の耕作土)の直下が造構確認面である黄褐色シルト質粘土層となっている。前述の段形成の他に耕作などによる全体的な削平を受けていると思われる。調査区最下部で検出された段切りによる平場であるSX1平場付近にはその堆積土の上層に第2層、黒褐色シルト層が形成されている。以下、層相について述べる。

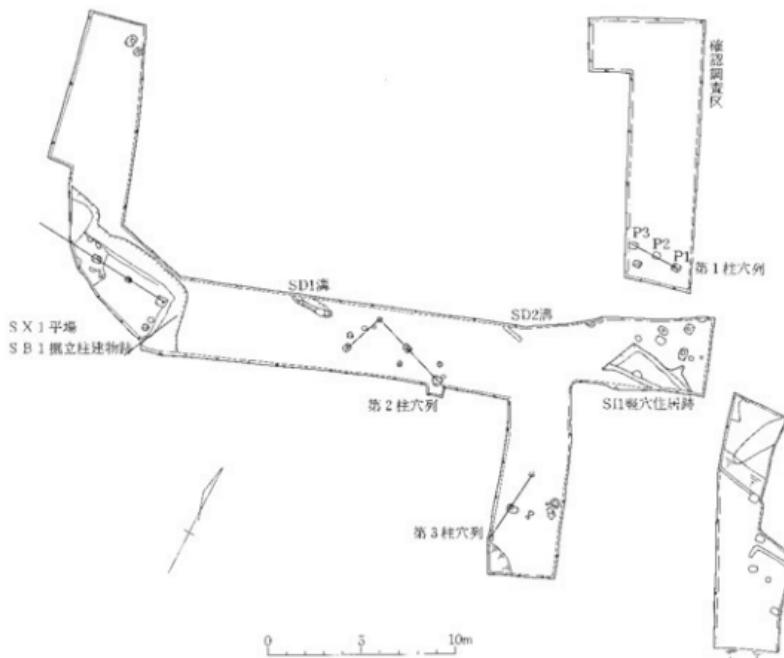


図3 4次調査トレンチ配置図

第1層は暗褐色(10 YR3/4)シルトで表土であり、その耕作土である1a層と斜面下部に分布し第3層に由来すると思われる凝灰岩ブロック(数mm単位)を雷なり状に含む1b層に分けられる。層厚は10~60cmで斜面の下方ほどその厚さを増す。第2層は黒褐色(10 YR3/2)シルトで前述のようにSX1平場付近に分布する。層厚は10~15cmである。第3層は凝灰岩ブロックを多く含む黄褐色(10 YR5/6)シルト質粘土。第1・2層に比して硬質でその上面は全遺構の確認面である。

3. 検出遺構と遺物

検出された遺構は竪穴住居跡1件(SI1)、段切りされた平場1ヶ所(SX1)と、その平場に建つ掘立柱建物跡1棟(SB1)、ピット22個(P1~P22)である。ピットの中で「掘り方」と「柱穴」が区別されるもの(9個)については掘立柱建物跡もしくは区画施設を構成すると考えられる。

(1) SI1 竪穴住居跡

第4トレンチ1区で竪穴住居跡の北半を検出した。住居跡の南西部は既造成工事による削平で破壊されている。平面形は方形を基調とし、その規模は北辺3.9m以上、西辺2.9m以上、面積は11m²以上を測る。他遺構との重複はない。煙道方向を軸線とした場合の方向はN-19°

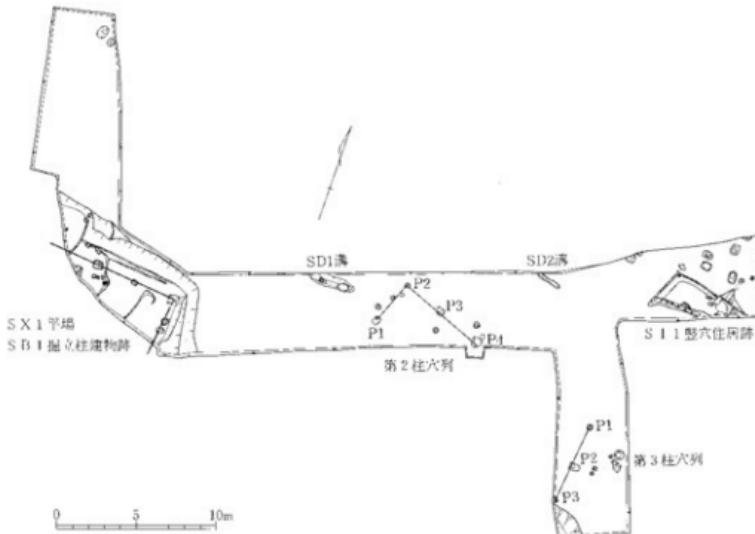


図4 第3・4トレンチ遺構配置図

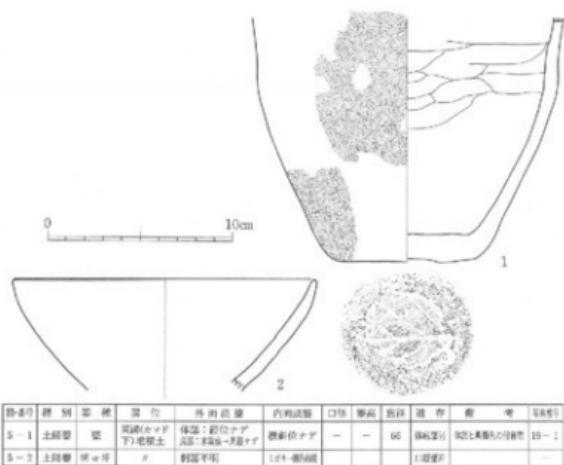


図5 S11豎穴住居跡出土遺物

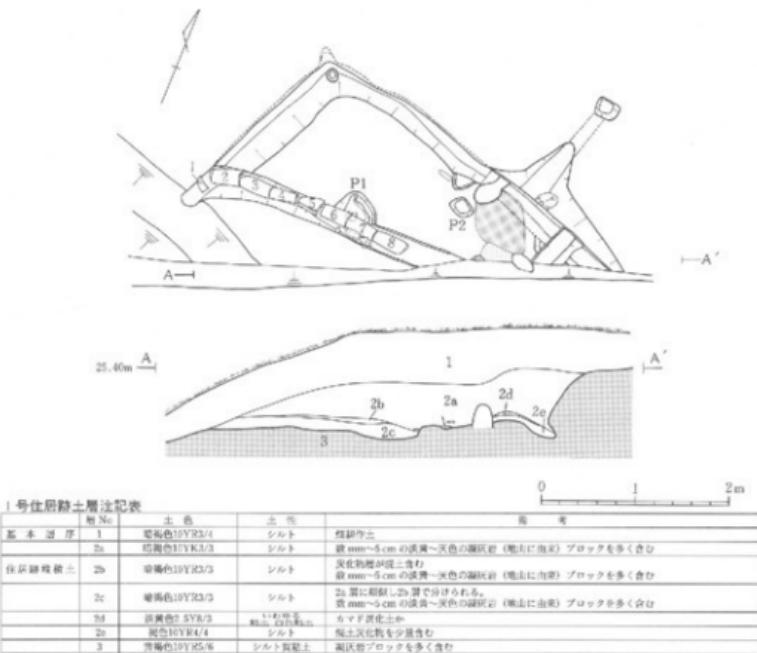


図6 S11豎穴住居跡

Eである。堆積土は暗褐色シルトで5層に細分される(図6)。壁は下部で急激に立ち上がり、遺存が良好なところでの標高は約58cmを計る。周溝は壁直下で検出された。上端幅20~40cm、下端幅10~15cmを計る。底辺が壁下端より外側に2~7cmほどくいこんでいるのが特徴である。床面は基本層序の第3層を床面としている。又、堆積土最下層である1c層上面に埋設瓦をおおって焼土を含む炭化物層(厚さ1~6mm)がおおっているので、この層の上面がレベルからみても最終の床面と考えられる。カマドは北辺に設置され、カマドの両袖部がわずかに遺存していた。袖部は白色粘土で構築されており東側袖部先端には赤褐色に焼けた凝灰岩(長さ26cm、幅14cm)が遺存していた。西側袖部先端のP2は同一の性格の石のすえ方痕の可能性がある。東西袖部の間に焼土が分布しており、その南側には炭化物層がみられた。この焼土をはがすと土師器壺一個体(体部)分の破片が散かれていた。

P1は明瞭な柱穴痕を検出できなかったが、その位置・形状などから柱穴(抜き取り痕か)の可能性がある。瓦埋設溝状遺構との切合は認められなかった。

施設としては瓦埋設溝状遺構(暗渠状遺構)がある。床面の東西方向に丸瓦(8個)が凸部を上にして埋設されていた。すえ方は幅約25cm、深さ16~20cmの溝状を呈している。トレンチ南壁に丸瓦が確認され更に東方に延びる様相を示している。溝状遺構は西側に傾斜している事などから用途としては排水施設と考えられる。遺物は上記の他、カマド下部周溝堆積土より土師器壺1個体と土師器壺もしくは壺の細片が出土している。

(2) SX1 平場・SB1 摂立柱建物跡

第3トレンチ南端と第4トレンチ西端で確認し、両トレンチを拡張・接続して検出した。

SX1 平場

南西方向への斜面を段切りして平場を造りだしている。斜面との関係で東西に長い平場と考えられる。上端の平面形は台形に開いているが下端の平面形のコーナーはほぼ直交している。規模は東西8.2m以上、南北3.6m以上である。平場の北東部が遺存している他、斜面下方の調査区外は近年の削平で破壊されている。段切りした壁の高さは、60~115cmで傾斜角は45度前後である。

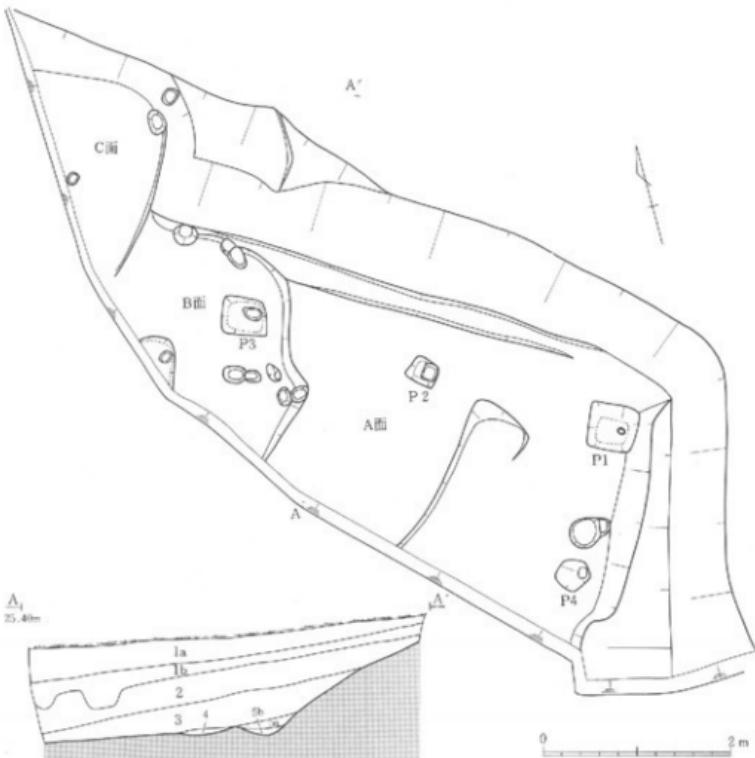
堆積土は暗褐色10YR3/4で傾斜面の延長線上に堆積している。底面の北線に沿って周溝が検出された。底面には段差によって3つの平坦面が形成されており、西方へ平坦面が低くなり、東からA・B・C面とし記述する。A面の北辺には周溝が設けられ、北東コーナーは隅丸方形を呈している。B面は周溝の連続性を切るかのように造りだされている。A面より低く、その段差は14~23cmである。C面はA面より斜面側に約1.2mくいこんでいる。B面より低く、その段差は2~12cmである。



図7 S11 壁穴住居跡埋設瓦

SBI 挖立柱建物跡

SX1 平場内より 13 個のピットが検出された。この内、掘り方と柱穴痕の区別のつくピットは 5 個あり、4 個のピットが SBI 建物を構成する。調査時は南北 1 間もしくは 1 間以上、東西 2 間の掘立柱建物跡と捉えた。しかし調査後、削平が擁壁設置域を越えてなされてしまい、緊急の調査を行った際、P1 と P3 の延長線上約 8.4 m の地点で柱穴痕のあるピット及びこれに直交



土層付記表

層 No.	土色	土 性	備 考
基本層序			
1a	褐色1YR6/4	シルト	地表上、耕作土上
1b	褐色1YR6/4	シルト	表土、地山ブロック入る
2	品褐色3YR8/4	シルト	主鉄器、頭骨、瓦片を含む。地山ブロック数 mm~1 cm 含む
3	暗褐色2YR3/4	シルト	
追加層序	4	暗褐色2YR3/4	地山層ブロック数 mm~數 cm 含む
	5a	暗褐色2YR3/3	3 通に似、やや堅い
	5b	灰青い褐色1YR6/7	砂質シルト

図 8 SX1 平場・SBI 挖立柱建物跡



図9 S X I 平場・S B I 掘立柱建物跡出土瓦(1)

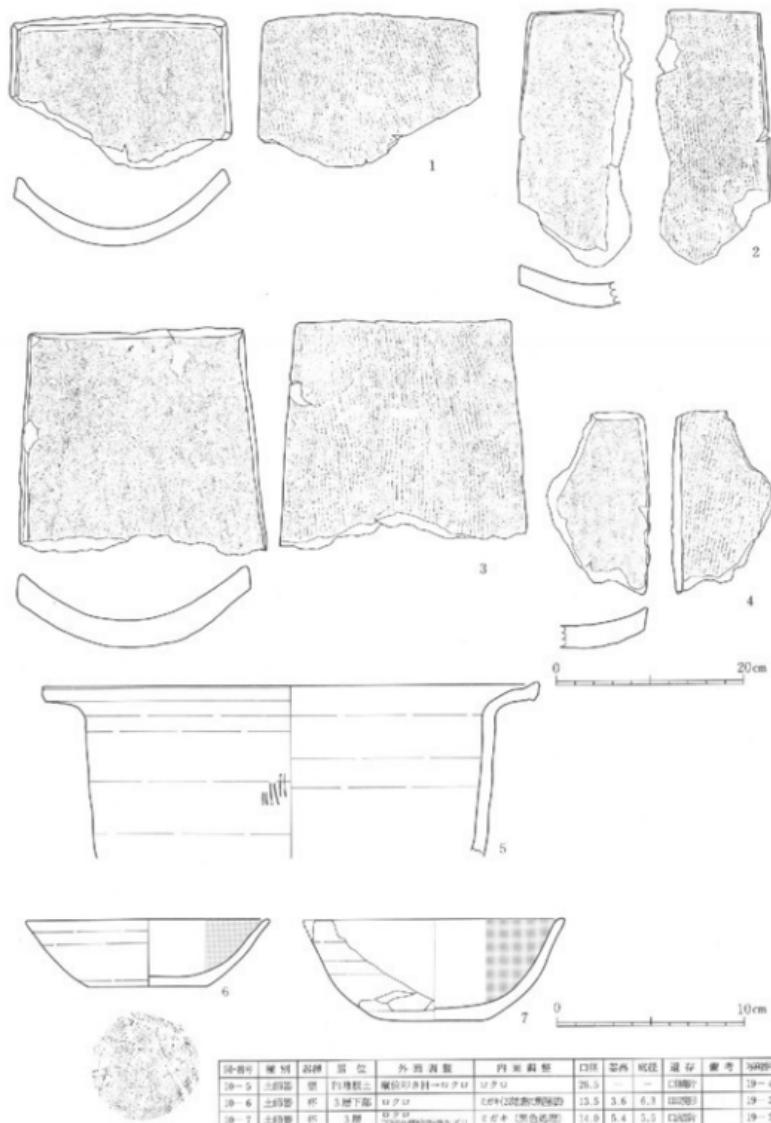


図10 SX I 平場・SB I 捩立柱建物跡出土瓦(2)・土器



図11 SX I 平場・SB I 掘立柱建物跡出土瓦(3)

するピットが検出された。P1とP16・17は直交し、P1とP4の間隔にP16とP17の間隔がほぼ等しいので一体の建物跡と考えられる。したがって東西4間、南北1間もしくは1間以上の建物跡であった可能性がある。この場合、桁行総長は約8.35m(P1-P3間 4.15m)、柱間は東より2.15m、2.0m、約4.2m(2間分)である。梁行は東妻で1.55cm、西妻で1.65cmを計る。梁行を軸線とした場合、N-5°-Eである。柱穴の平面形は長方形を基調とする。P1～P3の長軸は桁行方向と一致するがP16の長軸は桁行側柱ラインと西妻ラインに各々45°ふれており建物跡の西端の可能性を示唆している。柱穴の深さはP1:67.0cm、P2:61.5cm、P3:52cm、P4:49.5cm、P16:54.0cm、P17:52.0cmであり北東コーナーに位置するP1が最も深い。

SX1平場との関係については、その下端ラインと建物の側柱、西妻ラインがほぼ平行し、かつその下端ラインに近接しているので、SX1平場はSB1建物を建てるために斜面を切って造り出された可能性が高い。したがってSX1平場の底面の段差は、むしろ掘り方の段差として捉えた方が良いのかも知れない。

(3) ピット群

確認調査・本調査を含めて、明確には遺構としての組合せを認定できないピットは38個を数える。このうち掘り方と柱穴痕が確認されるピットについては建物跡、柱穴列として痕跡を残す区画施設を構成する可能性をもつ。方向・柱間寸法に規則性が認められるものを「柱列」としてとりあげておきたい。

① 第1柱穴列（確認調査区）

確認調査なのでP1のみ掘り上げ柱穴痕と掘り方を確認した。柱間寸法はP1とP2間が1.1m前後、P2とP3間が1.3m前後である。建物桁行列の可能性がある。

② 第2柱穴列

柱間寸法はP1とP2間が2.2m、P2とP3間と同じく2.2m、P3とP4間が2.4mである。北辺列の中軸線は必ずしも柱穴痕の中心を通らない事と各掘り方に斉一性がないため必ずしも組合うとは限らない。柱穴痕跡は方形を呈している。

③ 第3柱穴列

柱穴痕と掘り方の区別がつくのはP2のみである。柱間寸法はP1とP2間が2.1m、P2とP3間が2mである。

(4) 溝状遺構

溝状遺構2条を検出した。

① SD1溝状遺構

西端は調査区外にのびる。西端近くでやや弧状を呈する。東端の平面形は丸味をおびて完結する。断面形は台形状を呈する。長さ2.2m上端の最大幅は65cm、下端の最大幅は25cm、深

さは 20 cm を計る。直線部の方向は N-92°-E である。堆積土は暗褐色シルト。底面からピット 2 個が検出された。出土遺物は、土師器壺・甕片・須恵器壺の細片がある。

② SD2 溝状構造

長さ 1.2 m を計る直線な溝である。断面は皿形を呈する。上端の最大幅は 22 cm、下端の最大幅は 15 cm、深さは 15 cm を計る。方向は N-105°-E である。堆積土は暗褐色シルトである。

図 7 SI1 深穴住跡埋設瓦観察表

No.	剖面	操作段階	堆積 (cm)	古 土	目 面	側 面	地 素	色 調	発存度	分類	備考	写真撮影		
1	熱坑	掘反手		茶色ナメ	手書き・鉛筆芯の跡・セラフ	人頭骨・タヌリ	砂質	灰白	痕跡	I	八重台	16-1		
2	有底	堆積土	高19.1 幅1.7	剥離き・クロロケテナメ	泥化・表面に凹凸を残す	人頭骨・足骨	大型柱	白	生鍬式	田		16-2		
3	無地	P	幅1.2 高34.8 幅1.3	側壁ナメ	側面	B	±	石板粒	±	強烈式	日	16-3		
4	P	板巻き	高15.1 幅36.7 幅2.4	ナメ (中央部破損)	手書き・鉛筆芯の痕・手書き	B	±	石板粒	白・黒色粒	強吉灰	充	I	八重台	16-4
5	N	N	高15.4 幅25.8 幅2.1	剥離きナメ (部分破損)	手書き・鉛筆芯の痕・手書き	B	±	石板粒	灰白	±	±	16-5		
6	N	N	高33.8 幅2.1	剥離きナメ (一部破損)	手書き・鉛筆芯の痕・手書き	B	±	石板粒	灰	灰化灰	I		16-6	
7	有底	堆積土	高18.7 幅1.8	鐵色ナメ	剥離き・クロロケテナメ	側面	B	±	砂粒	灰白・青灰色	上鍬式	田	17-1	
8	E	E	幅16.3 高1.6			側面	B	±	石板粒・砂粒	灰白	±	III		17-2

注 1. 板巻き・耕巻きは各々、粘土板巻き・粘土紐巻きの略

2. 2・3・4・6・8 は広縫隙開きなわヶズリ

3. 側面形状 A ↗ B ↘

4. 玉縫穴は全損、一部欠損を含む

図 9, 10, 11 SX1 平場・SB1 挖立柱建物跡出土瓦観察表

No.	剖面	砂板	操作段階	堆積 (cm)	古 土	目 面	側 面	地 素	色 調	備考	写真撮影	
9-1	3層	丸瓦	粘土板巻き	2.3	ロコロナメ	追書き跡→手書き		石英粉多	にい・青緑色	有底		17-3
9-2	E	E	平底	2.0	新築ナメ	新築	B	白色粒 (細粒)	褐色			17-3
9-3	4層	P	平底	1.5	織物跡・鉛筆ナメによるスレ痕	布紋痕・鐵筋跡・ヘラケズリ	B	石英粒・白当粒多	灰黄色	無		17-4
9-4	3層	平瓦	耕巻き	2.1	手書き下書き→露出の性・ナメ	耕作跡→熟土板巻き→手書き	B	石英粒・白当粒多	灰白色			17-5
9-5	E	E	耕巻き	2.0	耕作手跡 (遺漏あり)	手書き・耕作跡 (遺漏)	A	ケズリ	黑・石英粒	灰白色		17-6
9-6	E	E	一枚作り	2.1	耕作跡	古瓦跡ナメ	A	ケズリ	白色粒	灰白色		17-7
9-7	E	E	織物跡作り	1.6	耕作の跡・露作の跡・ナメ	露作跡・手書き・鉛筆斜削れケズリ	B	石英粒	白色			18-1
10-1	E	E	平底	1.6	耕作跡作り	耕作跡・手書き・鉛筆斜削れケズリ	A	ケズリ	石英粒	灰白色		18-2
10-2	E	E	一枚作り	1.9	耕作跡作り	ツブレ・鉛筆跡・露作の跡	A	ケズリ	石英粒	薄オーブ・灰色		18-3
10-3	E	E	一枚作り	2.3	耕作跡作り	ツブレ	A	ケズリ	石英粒	灰白色		18-4
10-4	E	E	織物跡作り	2.1	耕作跡作り	露作跡・手書き	A	ケズリ	石英粒	にい・青灰色		18-5
11-1	E	E	丸瓦	1.7	耕作跡作り	手書き	-	否失型・白色粒	白色			
11-2	E	E	平底	2.0	耕作跡作り	手書き	B	白色粒若干	灰白色			
11-3	3層	平瓦	不規	2.4	鉛筆跡作り	古瓦跡・露作跡 (凸部にツブレ)	-	黑色粒	オリーブ灰色			
11-4	E	E	耕巻き作り	2.4	鉛筆跡作り	露作跡	-	不規則	オリーブ灰色			
11-5	3層	平底	不規	2.4	手書き作り	イデ	B	石英粒	青灰色			
11-6	E	E	耕巻き作り	1.9	露作跡作り・鉛筆ケズリ	鉛筆跡・手書き・鉛筆ケズリ	B	石英粒	白色			
11-7	E	E	不規	2.2	鉛筆作り	手書き・手書き	小石・石英粒	白色				

IV. 5次調査

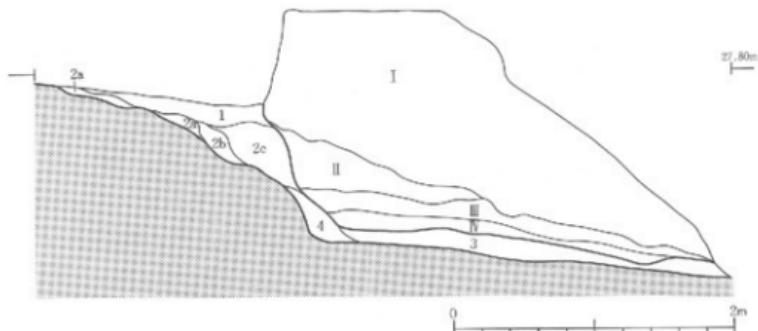
1. 調査方法

5次調査の開発予定地は、遺跡のある丘陵の南東部分の南に向いた傾斜地にあり、4次調査区からは道路をはさんですぐ北西側にある。標高は26~28m程度である。

調査は工事による破壊が予想される部分を対象としているため、設定した調査区はかなり変形となっている。調査区は南北に基準線を設け、3 m を単位としたグリッドを設定している。基準線は N-28°-W である。グリッド名称は、南北軸にアルファベット、東西軸にアラビア数字を用いている。

2. 基本層序

調査区の現況は前述のとおりの傾斜地であり、以前は畠地として利用されていたようであるが、一部は近年の削平をうけた平坦面となっていた。調査区南半部を除いては、表土の直下が遺構確認面である黄褐色粘土質シルト層になっている。南半部分についてはほとんどが近年の削平をうけた上に盛土されており、盛土直下にわずかに暗褐色系シルト層をはさんで、砂岩系の基盤面となり、この面が遺構確認面となっている。



燕次 5 次基本層序

No.	土色	ニ生	備考
I	浅褐色YR17/3と深褐色YR17/2のブロック混	砂壁面	大地返し層
II	黒褐色3/2R/3	透質シルト	炭灰返し層
III	に近い黒褐色YR17/3	透質シルト	小根まじり 天地返し層
IV	褐色3/9YR1/1	粘土質シルト	中やグラウ化
1	褐色10YR4/4	シルト	基礎層
2a	に近い褐色10YR5/4	砂生じり	
2b	暗褐色10YR3/3	シルト	液まじり 基本開孔
2c	暗褐色10YR3/2	シルト	2bと同 液基本開孔
3	に近い褐色10YR4/3	透質シルト	小根まじり 基本開孔
4	黑褐色10YR1/2	シルト	カーボン酸素若干まじる基本開孔

図12 基本層序

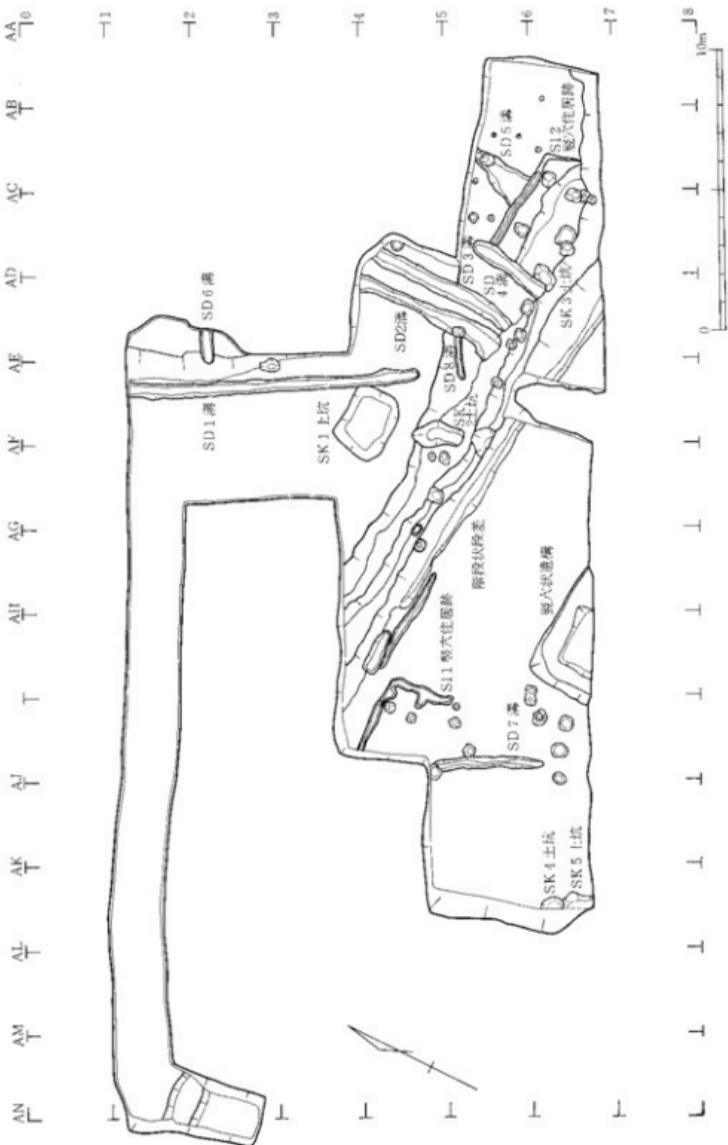


図13 5次調査箇所配置図

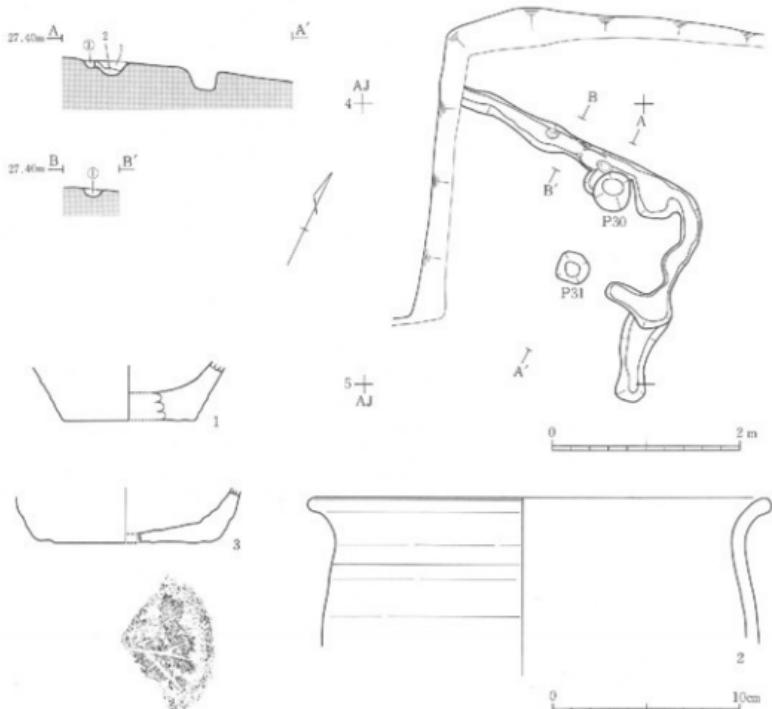
3. 検出遺構と遺物

発見された遺構としては、竪穴住居跡・土坑・溝跡・ピット等がある。遺構の遺存状況は、後世の削平の影響が大きくよくない。

遺物は平箱で10箱程度の出土量である。種類としては、土師器・須恵器・中世陶器・瓦・石器等がある。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2軒確認されているが、いずれも遺存状況はよくなく、プランの一部と周溝部



検察表

測定番号	土色	標高	傾度	外観調査	内面調査	寸法	沿革	遺存状況	遺存位置
14-1	土師器 灰	P1深度	-	-	-	7.0	遺存	-	-
14-2	土師器 灰	P1	ロクロ表面	ロクロ表面	-	-	口縁部	32-3	-
14-3	土師器 灰	P2深度 底部不整	-	-	-	9.0	遺存	-	-

土層注記表

測定番号	土色	土性	備考
測定①	黒褐色1/VB2/7	シルト	カーボン粒子。混土塊木じり
1	黒褐色1/VB2/3	シルト	カーボン粒子。混土塊木じり
2	黒褐色1/VB4/3	シルト	カーボン粒子若干

図14 S-11 竪穴住居跡・出土遺物

を確認したのみである。

① SI1 穫穴住居跡

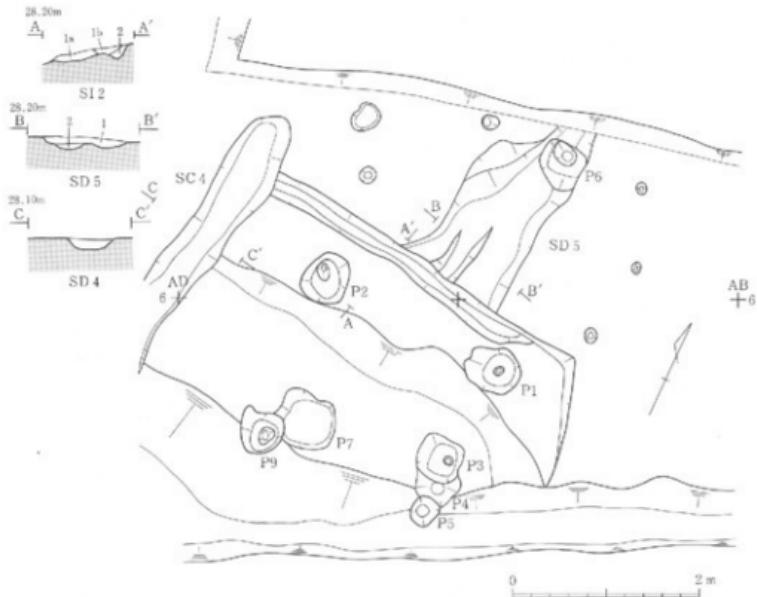
AI-4区で竪穴住居跡の北東コーナー部を検出した。住居跡の南西部は削平をうけている。

平面形は方形を基調とし、その規模は北辺2.90m以上・東辺2.25m以上を計る。他遺構との重複関係はみられない。東辺の軸方向はN-4°-Wである。堆積土は周溝内にのみ認められ、黒褐色系シルトの單層である。壁や床面は削平のため未検出であるが、北辺～東辺にかけて周溝を検出している。上端巾20～35cm・下端巾10～25cm・深さ2～10cmを計る。

遺物としては、北辺部の周溝側壁にはりつくように、土師器壺2個体の破片が横位の状態で出土している。

② SI2 穫穴住居跡

AB-6・AC-5・6区で竪穴住居跡の北東コーナー部を検出した。住居跡の南半は削平をうけている。



土壤注記表				土壤注記表					
遺構No.	層No.	土色	土性	遺構No.	層No.	土色	土性		
SI2	1a	暗褐色10YR3/3	シルト	埋まじり	SD1	1	暗褐色10YR3/3	シルト	マンガン鉄がむき出し
	1b	暗褐色10YR3/3	シルト	カーボン粒子が若干まじる	SD6	1	暗褐色10YR3/3	シルト	埋まじり
	2	堆積色10YR3/2	シルト	カーボン粒子が若干まじる		2	堆積色10YR3/2	シルト	埋まじり

図15 SI2竪穴住居跡

平面形は方形を基調とし、その規模は北辺 3.70 m 以上・東辺 1.40 m 以上を計る。西側を 4 号溝に切られるが、北側で 5 号溝を切って構築されている。北辺の軸方向は N 88° W である。堆積土は周溝内にのみ認められ、暗褐色系シルト層で 2 層に分けられる。壁や床面は削平のため未検出で、北辺部にのみ周溝を検出している。上端巾 17~27 cm・下端巾 7~12 cm・深さ 2~10 cm を計る。柱穴は 2 個確認された。P-1 は不整円形を呈し、長軸 60 cm × 短軸 47 cm・深さ 60 cm、P-2 は隅丸方形を呈し、一辺 47 cm 程度・深さ 20 cm であるが、底面に長軸 20 cm × 短軸 13 cm・深さ 40 cm の小ピットがあり、柱穴痕と考えられる。

遺物としては、ピットの堆積土中から土師器坏・甕が出土しているが、すべて破片資料で図示できるものはなかった。

(2) 土坑

土坑は調査区全体で 5 基確認された。

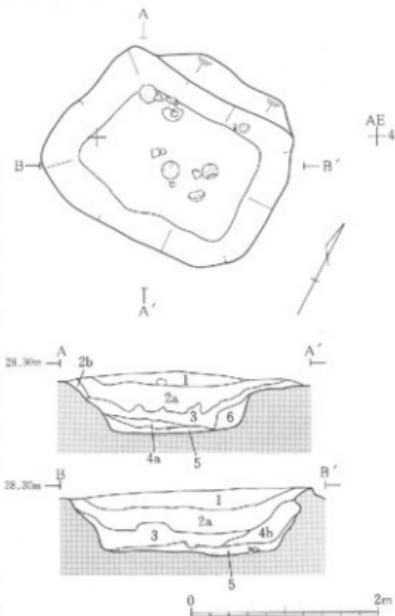
① SK1 土坑

AB-3・4 区で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、その規模は長軸 2.30 × 短軸 1.60 m を計る。北東部でわずかに 1 号溝を切って構築されている。東辺の軸方向は N 1° E である。堆積土は 5 層に大別され、1・2 層は灰黄褐色系シルト層、3~5 層は褐灰色系シルト質粘土層で粘性がかなりつよい。下層部に向ってグライ化が進んでいる。壁はかなり急角度で立ち上がり、残存する壁高は 50~60 cm を計る。

[出土遺物]

遺物としては、非クロロ・クロロ土師器坏・

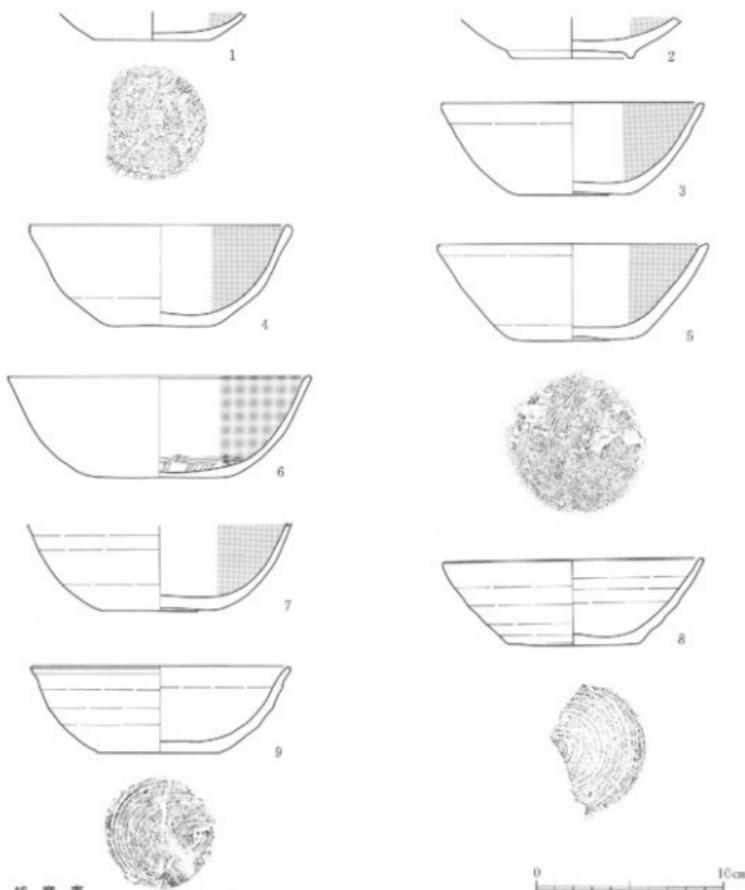
甕片・赤燒土器・須恵器坏・甕片・瓦などが
ある。ほとんどの遺物は堆積土中のもので、1・2 層からの出土が大半である。かなり多量の
遺物が出土しているが、ほとんど破片資料であり、廃棄場としての性格が考えられる。



土層注記表

遺構 No	層 No	土 色	土 性	備 考
SK1	1	灰黄褐色10YR5/2	砂質シルト	カーボン粒子へん的に入る。酸化鉄、マンガン板混入。
	2a	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	カーボン粒子へん的に入る。酸化鉄、マンガン板混入。
	2b	褐色10YR4/1	砂質シルト	砂まじり
	3	褐灰色10YR4/1	粘土	上部層に砂粒が混じる。カーボン粒子若干。グライ化土。
	4a	灰褐色5Y6/2	粘土	酸化鉄、マンガン板大層に入る。
	4b	灰褐色10YR4/2	砂	酸化鉄、マンガン板大層に入る。
	5	褐色10YR5/1	粘土	グライ化土。

* 1、2 層からの瓦・土師器・須恵器の出土が大半。瓦は埴生と陶のみ出土。3 層下~5 層中にかけて土師器瓦上



種類表

図・番号	種別	器種	置位	外観調査	内観調査	口径	脚高	底径	底深度	圖号	写真番号
17-1	土器	耳	P-1	クロマツ(往復型) 直腹耳付耳口	黑色透視 ヘラガサ	-	-	5.8	底部	-	-
17-2	土器	耳	C区1・2壁	クロマツ(往復型) 直腹耳付耳口	褐色透視 透視斜面不明	-	-	6.5	底部	-	-
17-3	土器	耳	P-7	クロマツ(往復型) 直腹耳付耳口	褐色透視	13.7	4.9	5.9	透視完形	31-1	
17-4	土器	耳	P-6	透視斜面し調板なし	黑色透視	13.4	5.3	5.0	透視完形	31-3	
17-5	土器	耳	P-8	クロマツ(往復型) 直腹耳付耳口	黑色透視 ヘラガサ透視	13.05	5.15	7.0	1/2	31-7	
17-6	土器	耳	P-2	クロマツ(往復型) マツツ 直腹耳付耳口	褐色透視 ヘラガサ透視	16.3	3.2	6.10	1/2	31-4	
17-7	土器	耳	P-9	クロマツ(往復型) 直腹耳付耳口	褐色透視 ヘラガサ透視	-	-	6.90	底部	31-2	
17-8	赤陶土器	耳	D区3壁	クロマツ(往復型) 直腹耳付耳口	クロマツ(往復型)	13.9	4.5	4.5	1/3	31-5	
17-9	赤陶土器	耳	A区P-4・5	クロマツ(往復型) 直腹耳付耳口	クロマツ(往復型)	14.2	4.7	5.7	1/2	31-6	

図17 SK 1 土坑出土遺物



图18 SK 1 土坑出土瓦

図17は堆積土中からの遺物である。土師器坏1~7は、外面ロクロ調整のもので、内面が黒色処理されるが調整は磨滅により不明である。底部切り離しのわかるものは回転糸切りで、すべて無調整である。器高の割合が大きく、全体に深めの器形である。体部の立ち上がりは、内弯気味のもの(4・6・7)と、やや外反気味となるものがある(3・5)。8は赤焼土器で外面ともにロクロ調整が施され、底部は回転糸切り無調整である。体部はやや内弯気味に立ち上がる。9は須恵器坏で、体部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。

瓦は、丸瓦2点、平瓦9点の計11点が出土している(図18)。1は平瓦Ib類で、凸面に正格子叩き目がみられ、凹面はナデ調整が施されている。3は平瓦3類で、凸面はナデ調整、凹面は布目痕と模骨痕がのこる。2・4・6は平瓦5類で、凸面は繩叩き後にナデ調整が施され、凹面は布面痕と模骨痕がのこる。5・7は平瓦4類で、凸面は縱方向の繩叩き目がみられ、凹面には布目痕が残るがナデ調整されている。5は凸面繩叩き後に一部がナデ調整されている。

丸瓦2点のうち9は有段のものである。

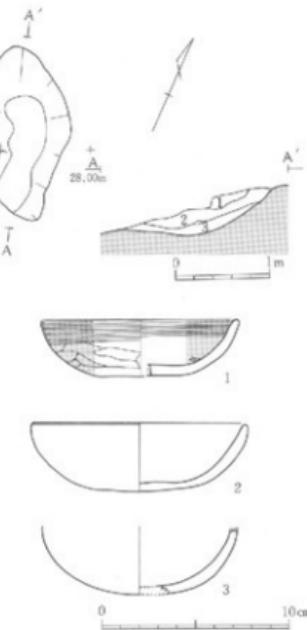
② SK2 土坑

AE-4区で検出された。平面形は橢円形を呈し、その規模は長軸1.30×短軸0.90mを計る。長軸方向はN-30°Wである。堆積土は3層に大別されるが、灰黄褐色系シルト層でグライ化が進んでいる。壁はゆるやかに立ち上がっており、残存する壁高は20~40cmを計る。

[出土遺物]

非ロクロ土師器坏3点が床直で重なって出土した。器形はいずれも底部が丸底風の平底で、内弯気味に立ち上がる小形の坏である。(図19)

1は、内外面ともに黒色処理され、ていねいな調整が施されている。外面は、口縁部が横ナデされ、体部~底部にかけてヘラケズリが施される。内面はミガキ調整である。2・3は、磨滅のため内外面の調整は不明であるが、内面は黒色処理されている。



器・番号	種類	形状	場所	外観調査	内面調査	口径	西高	東低	底存	測定	万葉名
19-1	土師器	平	Ⅱ級粘土	打鍛成型アラカルト 底部へ回転糸切り	ミカゲ調整	10.5	3.0	4.5		伊野原ともに褐色泥土	32-3
19-2	土師器	平		削成不規	剥落不明	11.5	2.7	4.5		内面黒色処理	32-1
19-3	土師器	平	P1	削成不規	剥落不明	10.0	3.5	5.0		内面黒色処理	32-2
遺 品 No.											
留 置 No.											
土 色											
SKJ-1	1	灰褐色(3YR4/3)		シルト	カーボン酸鉄入。マンガン斑						
	2	灰褐色(3YR4/3)		シルト	カーボン酸鉄入。マンガン斑やグライ化。						
	3	灰褐色(3YR4/3)		シルト	カーボン酸鉄入。マンガン斑グライ化土。						

図19 SK2 土坑・出土遺物

③ SK3 土坑

AC-D-6 区で検出された。平面形は不整形を呈し、その規模は長軸 1.30 m・短軸 0.90 m を計る。長軸方向は N-10°-E である。堆積土は黒褐色系粘質シルトの単層である。壁はかなり急角度に立ち上がり、残存する壁高は 30~40 cm を計る。

遺構 No	層 No	土 色	土 性	備 考
SK3	1	黒褐色10YR2/1	粘土質シルト	擦りじり、黒褐色10YR2/2がまじる
	2	黄褐色10YR6/6	砂質	擦りざさら

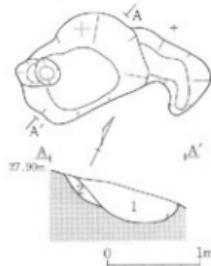


図20 SK3 土坑

遺物としては、土師器（非ロクロ）壺・甕があるが、細片のため図示できるものはなかった。

④ SK4 土坑

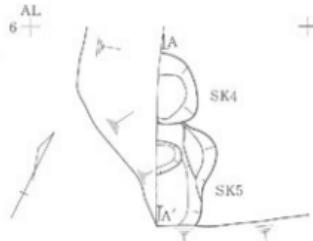
AK-6 区で検出された。プラン西側が調査区外にかかるが、平面形は不整円形を呈すると思われる。その規模は南北長 0.80 m・東西長 0.45 m 以上と思われ、第 5 土坑を切って構築されている。堆積土は 2 層に大別され、黒褐色系シルト層である。壁はかなり急角度に立ち上がっており、残存する壁高は 30~40 cm を計る。

遺物としては、土師器壺があるが、細片のため図示できるものはなかった。

⑤ SK5 土坑

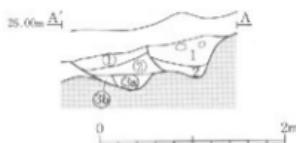
AK-6 区で検出された。プランのほとんどが調査区外にかかるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。その規模は南北長 1.05 m 以上・東西長 0.60 m 以上と思われ、4 号土坑に切られている。堆積土は 3 層に大別され、にぶい黄褐色系シルト層で疊まじりである。壁はかなり急角度に立ち上がっており、残存する壁高は 25 cm を計る。

遺物としては土師器（非ロクロ）甕があるが、細片のため図示できなかった。



(3) 溝・溝状遺構

調査区全体で 8 条検出されている。いずれも小規模なもので、掘りこみも浅く、確認長も短かい。出土遺物は、1・2・3 号溝から土師器壺の細片と平



土層注記表	遺構 No	層 No	土 色	土 性	備 考
SK4	1	オーラーブ色10YR7/1	砂質シルト	「耕作跡」なし。カーボン混入	
	2	灰青褐色10YR4/1	粘土質シルト		
SK5	①	オーラーブ色10YR7/1	砂質シルト	カーボン混入。若干	
	②	にぶい黒褐色10YR4/3	シルト	カーボン混入。擦りじり	
	③a	暗褐色10YR4/4	シルト	擦りじり	
	③b	にぶい黒褐色10YR4/3	シルト	2回きりかに民窯陶110YR4/2に混入	

図21 SK4・5 土坑

調査 No.	地名	全高(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	深さ(cm)	断面	方位	出土遺物	備考
SD1	AF2-AF5	10.30	30~55	15~35	10~30	円錐形	N 29° W	土壌壁(内層) I、平瓦 1b 種 1	SD1 にわざかに切られる
SD2	AF5+6	3.50	40~100	35~65	3~10	舟底形	N 1° E	土壌壁(内層) I、平瓦 1 種	SD1 を切っている
SD3	AD5+AD5+6	5.30	40~65	25~35	5~15	舟底形	N 2° R	土壌壁 1	
SD4	AD6	3.00	45~60	30~35	3~10	舟底形	N 0° E		SD1 を切っている
SD5	AC6	2.00	45~125	35~110	5	舟底形	N 10° E	石器出土	SD1 に切られる
SD6	AE3	1.20	35~40	16~20	20~30	U 形砂	N 24° E		
SD7	AJ6	4.00	20~40	5~10	3~10	舟底形	N 26° W		
SD8	AB+AF6	1.00	16~18	14~16	1~3	舟底形	N 21° R		SD1 に切られる

第3表 溝・溝状遺構観察表

瓦が、5号溝から右鐵が出土している。他の遺構との関連もみられず、時期・性格ともに不明である。

(4) ピット群

調査区全体で41個確認されている。調査区中央部を東西に走る階段状の段差の上面に29個、下面に12個検出されているが、柱痕跡がみられたものはなかった。建物跡を組むようなものはみられず、性格や時期等は不明である。

(5) 階段状段差

調査区中央部を東西に走るもので比高差は1.20m程である。調査区南東側の4次調査区内では現地形としてこの段差が確認されている。平場を作りだすための整地に伴うものと思われるが、段切りの時期については近年のものとしておきたい。

4. 遺構外の出土遺物

〈瓦〉

瓦は、軒丸瓦1・丸瓦6・半瓦40の計47点が出土している。1号土坑及び2号溝の堆積土中から出土した12点を除き、基本層中又は表採資料である。全て破片資料で、しかも小破片が多いため全容を知りえるものはない。

図23-1は軒丸瓦で、欠損品のため全容が不明であるが、「細弁蓮花文軒丸瓦」と思われ、多賀城IV期310-B類とされるものである。2は丸瓦4a類で、縄叩き後にナデ調整が施されている。3は丸瓦3類で、凸面ナデ調整が施される。4は平瓦1a類で、凸面に斜格子叩きがみられる。5・6は平瓦2類で、凸面平行叩きのものである。5は二方向の平行叩きがみられ、6は横方向の荒い叩きが施されている。7は平瓦3類で、凸面ナデ調整、凹面には横骨筋がのこる。8~10は平瓦4類で、凸面には縦方向の縄叩き目がみられ、凹面には布目筋がのこるものナデ調整が施される。8の凸面には、凹型台の側端部圧痕がのこる。

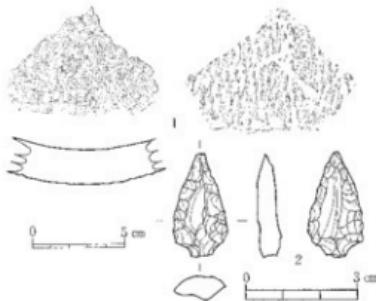


図22 SD2溝出土瓦・SD5溝出土遺物



図23 遺構外出土瓦

今回出土した瓦を成形・調整技法からみると、平瓦 40 点のうち 25 点が 4 類とした凸面縁叩きのものである。丸瓦については、3・4 類がそれぞれ 3 点ずつで、1・2 類の丸瓦はない。造瓦技法についてみると、平瓦については「粘土桶巻き作り」と「一枚作り」の 2 つにわけられる。平瓦 1・2・5 類、3 類の一部が桶巻き作り、平瓦 4 類は一枚作りとおもわれる。

次に瓦各類の年代等についてであるが、平瓦 1～3 類、丸瓦 3 類は多賀城創建期以前か、創建期の可能性が考えられる。平瓦 4 類のなかには、凹型台の側端部圧痕をのこすものがあり、これは多賀城の平瓦 II B-b 類、III 期に分類されている。

5. 出土遺物（土師器）について

器種としては、壺・高台付壺・甕がある。ロクロ使用のものと、ロクロ不使用のものがあるが、大半はロクロ使用のものである。SK1・2 土坑から出土したものをぞいては、いずれも小破片であり図示できるものはなかった。

SK1 土坑の資料はいずれも堆積土中のものであるが、遺物量も多くほぼ完形となる壺が 8 点出土している(図 17)。これらの壺は 4 をのぞいては、いずれも外面にロクロ目が観察され、内面に黒色処理・ヘラミガキが施されるもので、底部切り離しは回転糸切りである。体部の立ち上がりは、内窓気味と外反気味のものとがあり、無調整である。

これらの土器は、その特徴から「表杉ノ入式」に相当するものであり、平安時代を通じて製作・使用されたと考えられている。表杉ノ入式の土師器壺は、成形・調整技法の点から細分が指摘されており、製作技法の手数の省略化により変遷するとされている。このことは、ロクロ技術の進展の結果として、体部再調整から無調整へと変化していくものと把えられる。SK1 土坑の壺をこれにあてはめてみると、体部無調整であることから、表杉ノ入式のなかでもより新しい様相を示していると考えられる。

図18 SK1 土坑出土瓦観察表

分類	製作方法	厚さ	凸面	凹面	側面	色面	備考	年差区分
1 平瓦 3 類	不明	3.5mm	倍子叩き(平瓦)	ナメ調整	ヘラケズリ	灰白色	多賀城 I 期	29-1
2 平瓦 5 類	成形き作り	2.3mm	調子・コマナ・ナメ調整	石口張(底面) 横骨底	ヘラケズリ	灰白色	I 期・II 期	29-2
3 平瓦 3 類	成形き作り	2.3mm	ナメ調整(糊口?)	心口張(底面) 横骨底	ヘラケズリ	灰白色	I 期・II 期	29-3
4 平瓦 5 類	成形き作り	2.4mm	調子・ナメ調整	石口張(底面) 横骨底	ヘラケズリ	灰白色	No.2・同一個体	29-4
5 平瓦 4 類	不明	2.3mm	調子・ナメ調整	石口張(底面) 横骨底	小口面ヘラケズリ	黄褐色	I 期・II A 期	29-5
6 平瓦 5 類	成形き作り	2.3mm	調子・ナメ調整	心口張(底面) 横骨底	ヘラケズリ	灰白色		29-6
7 平瓦 4 類	不明	1.6mm	糊叩き(底方付) 石口アレ	石口張ナメ調整		灰褐色	II B 期	29-8
8 丸瓦 3 類	?	2.0mm	ナメ調整	石口底		灰褐色		29-7
9 丸瓦 4a 類	?	2.0mm	糊叩き・ロクロナメ調整	石口底	ヘラケズリ	灰白色	II B 期	29-9

図22 SD2 溝出土瓦・SD5 溝出土遺物観察表 (単位 cm)

SD2 溝出土

分類	製作方法	厚さ	凸面	凹面	側面	色面	備考	年差区分
1 地面埋没	平瓦 4 類	不明	2.0	糊叩き(底方付)	石口底(ツヅレ)	小口面ヘラケズリ	灰褐色	

SD5 溝出土

分類	厚さ	全長	最大幅	幅	T/L	材質	年差区分
1 石板	SD5 石板	2.9	1.5	0.5	直角	32-4	

図23 遺構外出土瓦観察表

No.	地区・層位	分類	製作技法	厚さ	凸・凹	目 横	相 横	色調	備考	年高層級
1	AEP 4 区	新丸瓦(縦目裏文瓦)	不明	1.5cm	溝甲ヨリテ調整	布目模	ヘラケズリ	灰	素面切削面 素面切削面	30-1
2	AB-6 区	丸瓦4a 磨	フ	1.5cm	溝甲ヨリテ調整	布目模	ヘラケズリ	灰		30-2
3	フ	フ 2 層	フ	1.3cm	ナガ調整	布目模		灰白色		30-2
4	AE-6 区	平瓦1a 磨	フ	2.0cm	柄ナギ押子(斜格子)	布目模		灰		30-4
5	AM-2 区	平瓦2 层	柄在き作り	2.1cm	四隅ナギ向(中矢立)底	布目模(底面)		灰		30-5
6	AE-6 区	平瓦 2	1枚作り	2.0cm	四隅ナギ向(中矢立)	布目模(底面)	ナガ調整	灰	素面切削面	30-6
7	AE-6 区	フ 3 层	柄巻き作り	1.8cm	ナガ調整	布目模(底面)横作目	ヘラケズリ	灰白色		30-7
8	AAP-4-5 区	フ 4 层	不明	2.0cm	刷毛押(底面)・溝甲ナブレ	ナガ調整一部に布目模	ヘラケズリ-絞面とり	灰	白目ト糊 白目糊	30-8
9	AEP-4 区	フ	1枚作り	2.8cm	刷毛押(底面)溝甲ナブレ	布目模、ナガ調整	ヘラケズリ-絞面とり	灰	白目糊	30-9
10	フ	フ	不明	2.0cm	溝甲ヨリテ(底面)	布目模(底面)	ナガ調整	ヘラケズリ	灰	

V. 6 次 調査

1. 調査方法

6次調査の開発予定地は、舌状丘陵上に立地する燕沢遺跡の中でも高所（標高約30m）のゆるやかな北斜面上にあたる。1次調査区の東に隣接しており、市道をはさんだ北側に2次調査区がある。

調査は、掘削工事となる車乗り入口及び市道拡幅部を対象として試掘調査を行ったのち、本調査を実施した。逆L字型となる調査区のうち、南北にのびる部分をI区、東西にのびる部分をII区としている。

2. 基本層序

調査箇所は舌状丘陵上に立地する燕沢遺跡の中でも高所（標高約30m）のゆるやかな北斜面上にあたる。現況は畑地として利用されており、畑の耕作土をはぐと大部分のところで明黄褐色シルト質粘土層が分布しており、この上面が全遺構の確認面となっている。以下、層序の内容を記す。

第1層は、にぶい黄褐色（10 YR4/3）シルトで表土であり、畑の耕作土である。層厚10~30cm。

第2層は、にぶい黄褐色（10 YR5/4）粘土質シルトで調査区北部の一部に分布する。層厚5~10cm。第3層は明黄褐色（10 YR6/6）シルト質粘土で第1・2層に比して硬くしまっている。

3. 検出遺構と遺物

検出された遺構は溝状遺構8条（SD1~8）、土坑2基（SK1・2）、ピット69個、焼面1箇所である。全体に耕作等における削平が及んでおり遺構の遺存状況は悪い。焼面は周辺の溝状遺構、柱穴痕のあるピットと組み立穴住居跡を構成する可能性があり、後述する。

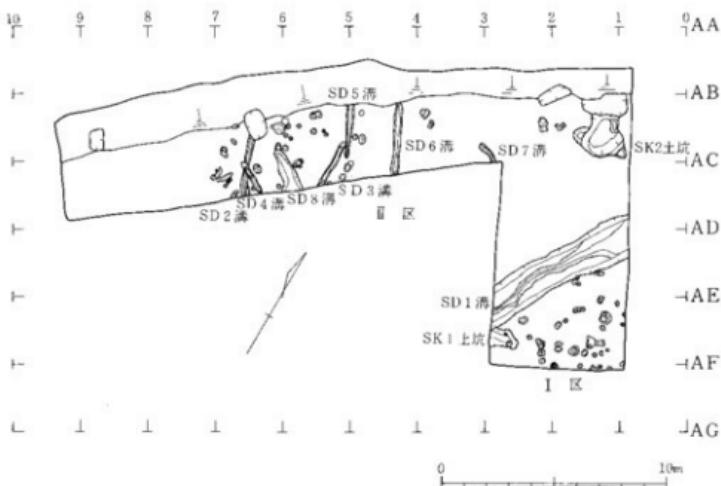


図24 6次調査構造配置図

(1) SD1 溝状遺構

検出長7.75mで更に東西に伸びる。上端幅1.5~1.8m、下端幅1.1~1.35mを計る。方向はN-31°-Eである。SK1土坑と重複し、これを切っている。断面形は逆台形状を呈し壁面の傾斜角は30~40°で直線的もしくは内湾する。堆積土は第1a層暗褐色(10 YR3/3シルト)、第1b層は黒褐色(10 YR3/2)シルト、第2層は暗褐色(10 YR3/3シルト)で黄褐色(10 YR5/6)シルトの粒子が混合する。堆積土層は傾斜面に沿った自然堆積の様相を呈している。

底面は、ほぼ平坦であるが、底面のほぼ中央に浅い(深さ2~3cm)溝状遺構がある。調査区西端では上幅20cmであるが、東端ではSD1溝状遺構の下端に接続してしまう。底面傾斜は北東方向へ、ゆるやかに傾斜している(6mで標高43cm下がる)。



図25 SK1土坑出土・土玉

土玉観察表

No	種別	記録	場所	直徑	頂上	色調	備考	写真
1	土玉	SK1 墓土	3.3	石英粉多い	明褐色	ほ4mm程の貫通孔がある	写真6	

出土遺物は堆積土1層より瓦(丸・平瓦)片、土師器坏、甕片、赤焼土器?坏(回転糸切離し非調整)、磨面のある円碌が出土している。堆積土2層からは土師器坏・甕片、須恵器坏片、

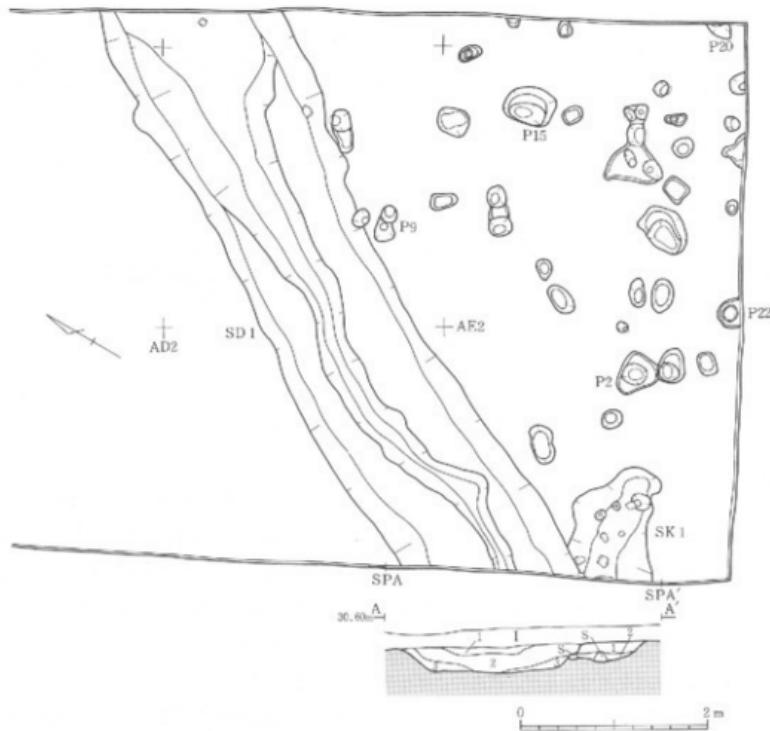


図26 SD1溝状遺構・SK1土坑・ピット(I区)

図27 SD1溝他出土瓦類察表(単位cm)

No.	地区・部位	分類	製作技法	厚さ	凸面	凹面	斜面	色調	備考
1	表土	丸瓦3種	不明	1.5	ナメ調面	布目張		灰褐色	
2	表土	丸瓦	?	2.4	ナメ調面?	布目張	三面ヘテクズリ	灰褐色	
3	SD1堆土	丸瓦3種	?	1.9	ナメ調面	布目張		褐色	
4	表土	平瓦2種	?	2.3	滑面(漆付有り)	布目張(緻密)		灰褐色	
5	1区	平瓦4種	?	2.2	鍍金(漆付有り)	布目張	ヘラケズリ	灰褐色	一面に自然剥げかかる。
6	1区	平瓦4種	?	2.2	鍍金(漆付有り)	布目張			

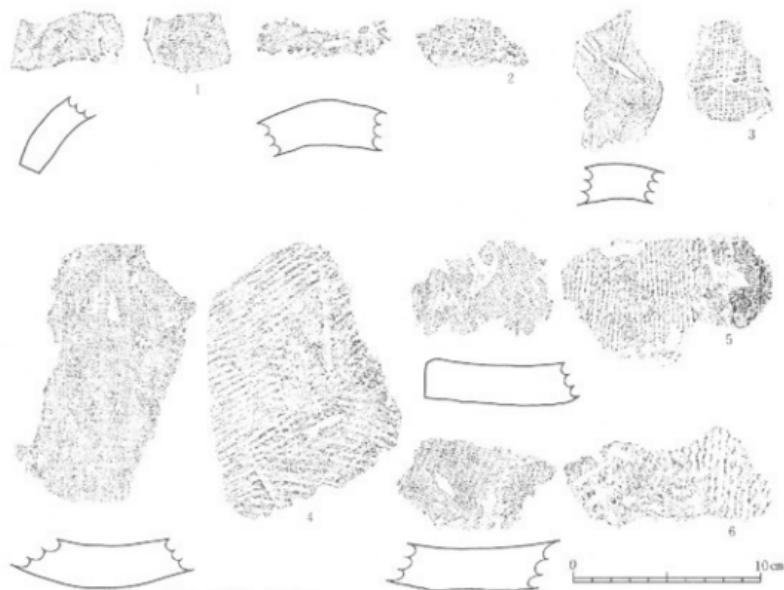


図27 SD1溝他出土瓦

赤焼土器？坏片が出土している（瓦は出土していない）。堆積土1層からの出土が相対的に多い。

SD2～8溝状造構については表記載する。

(2) SK1 土坑

SD1溝状造構と重複し、これに切られる。長幅1.32m以上、最大幅1m、深さ17cm(最深)を計る。平面形は不整形で、造構は調査区西方にのびるため全容を知りえない。堆積土は第1層黒褐色(10 YR3/2)シル

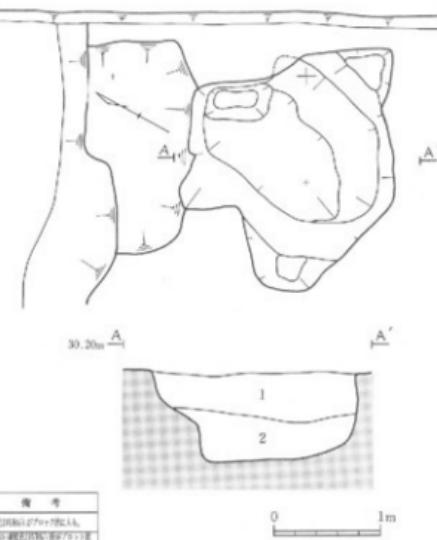


図28 SK2土坑

土層注記表

地層No.	層No.	土色	土性	備考
SK2	1	黒い砂質土(10 YR 2/2)	粘質シルト	層2は6mから7mにかけて
	2	褐色(10 YR 4/4)	粘質シルト	層2は6mから7mにかけて

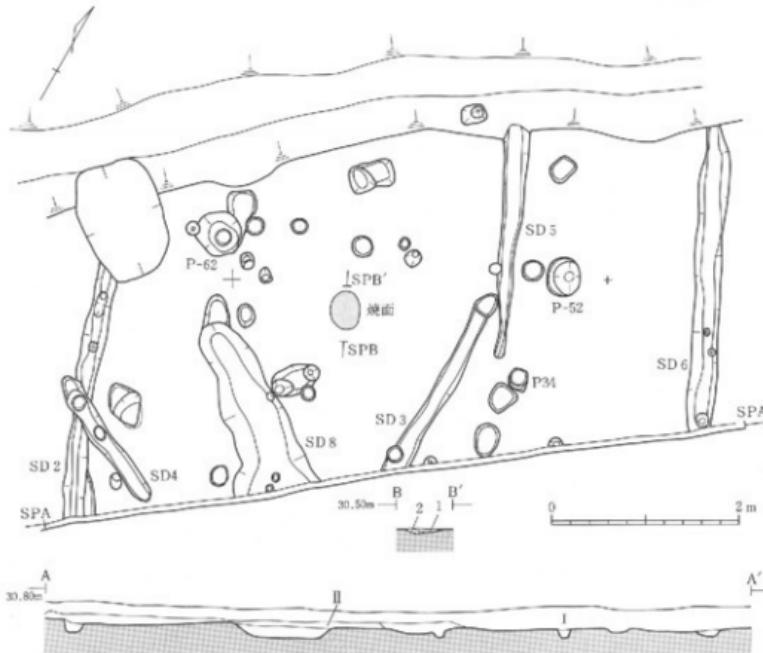
調査表

測量 No.	層 No.	種類	地 位	外 内 気温	内 容 調査	口 深	底 面	底 鮫	遺 存	備 考	測定数
29-1	1	均等	30	気温測定	測定不明	6.0	—	2.4	測定なし	SD-2	52-5

ト、第2層は黒褐色(10 YR 2/3)シルトで炭化物を多量に含む。土層は水平堆積の様相を呈している。底面には凹凸があり、円礫(5~20 cm)が底面及び堆積土2層(計7個)中より出土している。円礫が底面で組合っていた可能性がある。出土遺物は堆積土中より土玉1個(図25)、土師器片若干が出土している。

(3) SK2 土坑

上端の平面形は不整形、下端の平面形は不整橢円形を呈する。長軸2.1m、深1.8m(最深部)



遺構 No.	層 No.	土 色	土 性	備 考
积水層	I	くじら頭褐色10YR 4/4	シルト	耕作土
	II	くじら頭褐色10YR 5/4	粘土質シルト	
加湿	1	赤褐色のある褐色10YR 4/4	シルト	鐵土
	2	赤褐色10R 4/4	シルト	地山が熱をうけて赤変している。
SD1	1	褐色10YR 4/4	シルト質粘土	
SD8	1	赤褐色褐色10YR 6/6	シルト質粘土	
SD3	1	赤褐色10YR 3/3	粘土質シルト	
TB	1	褐色10YR 4/4	シルト質粘土	
SD6	1	褐色10YR 4/4	シルト質粘土	

図30 その他の遺構(II区)

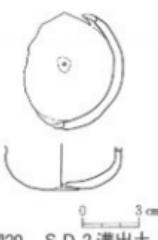


図29 SD 2溝出土

を計る。堆積土はにぶい黄橙色(10 YR7/3)粘土質シルトと暗褐色(10 YR3/3)シルトがブロック状に混合し、人工的な堆積の状況を呈している。堆積土に風化した円礫が多数含まれる。壁面付近には半ば炭化した樹木片が認められた。

(4) ピット

ピットは69個検出された。このうち掘り方と柱穴痕の確認されたのは(可能性を含めて)、P2・9・15・22(I区)・34・52・62(II区)である。P2とP15及びP20は直交区画をなすものの、柱間寸法等の検討ができないので可能性の域を出ない。

(5) 焼面と竪穴住居跡の可能性

II区のほぼ中央部で焼面が検出された(図30)。平面形は南北を長軸とする楕円形である。長軸42cm短軸30cmを計る。深さ約3cmの焼土を掘り上げると、第3層が熱により赤変していた。この焼面の東方3.5mにSD6溝状遺構があり、これとほぼ平行して、その西約6.2mにSD2溝状遺構が存在する。両溝状遺構の堆積土からは非ロクロ使用の土師片一括が出土しており、SD2のものは古墳時代前期塩竈式の壺体部一括である(図29)。SD2とSD6にほぼ直交して、掘り方と柱穴痕の区別の認められるP62とP52がある。さて本調査区の道路をはさんで北側の第2次調査区では古墳時代前期の竪穴住居跡が4軒(可能性を含めて)検出されている。このうち遺存の良好なSI5の概容を記す。北辺と南辺に周溝が検出され両者の距離は約6.2mを計る。柱穴は住居跡対角線上に4基認められる。住居中央部北寄りに地床炉と考えられる「焼土塊」がある。東辺の軸線はN-25°Wである(本調査区のSD2・6に近似)。以上の点は本調査例が焼面とSD2・6及びピットに構成された竪穴住居跡の可能性が高いことを示唆するとともに、2次調査で検出された丘陵頂部の3軒の住居跡と同一グループ(位置・方向から)を成す可能性をも示唆しているといえよう。

	幅 上輪 下輪	高 (m)	深さ	方向	遺構	確認面	断面形	堆積土	遺物	備考
SD2	18~25	7~8	2.65±0.1	N-27°W	SD4に割られる 柱穴の跡	第3層上位 #無泥合土	褐色10YR4/4シルト質粘土	豊臣より出向(?)	日加賀陶器の可能性	
SD3	13~25	12~16	2.0±	1~8	N-2°E	#	#	単面色10YR2/2灰土質シルト		
SD4	38~22	12	1.62	13~14	N-27°W	#	#	-		
SD5	25(重複)	17(重複)	2.55±0.1	3~7	N-27°W	#	#	-		
SD6	30	16~13	3.2±	2~4	N-27°W	#	#	褐色10YR4/4シルト質粘土		日加賀陶器の可能性
SD7	13~18	3~8	1.0±	1~7	直段	#	#	12号瓦 にぶい褐色10YR3/2シルト質粘土		
SD8	18~25	18~79	1.95±	32	N-54°W	#	#	直段 所持褐色10YR3/2シルト質粘土		

(単位cm)(検出長)

第4表 溝状遺構観察表

VI. 4～6次調査考察とまとめ

1. 4次調査

8世紀後半頃の堅穴住居跡1軒、平安時代の段切りされた平場1及び掘立柱建物跡1棟、時代不明の溝状遺構2条、ピット22個を検出した。

これらのなかで一括遺物である1号住居跡の暗渠状遺構を構成していた埋設丸瓦（8点）について特にとり上げておきたい。この中で多賀城跡及び関連遺跡の調査による編年と分類に対応するのは本分類のIII類、即ち粘土紐巻き技法による有段丸瓦のみである。この種の丸瓦は多賀城II～IV期の各期に存在し、年代的にも8世紀後半から10世紀まで存在している。

I類は粘土板巻の無段瓦である。多賀城編年のI期に属するIA類の特徴と比較してみると、明瞭な2次叩きを確認できなかったが、凸面には、ていねいなナデもしくはケズリ調整（主に縦位）があり、凹面の一定範囲にツブレが認められるものが3個ある。多賀城編年IA類の中には少数ではあるが凸面を縦位ケズリ調整するものがある（注1）。本遺跡IA類はこれらの特徴から、布を敷かない状態での凸型台を使用している可能性が高い。平成2年度調査の大蓮寺窯跡2号窯には粘土板巻き無段瓦で凸型台圧痕を残す例が一定量ある。（凸面は平行叩き→軽いナデもしくは平行叩き）。このタイプの丸瓦は凹面に凸型台圧痕をもたず、凸面縦叩き→ナデ・ケズリによりスリ消しするタイプの丸瓦とともに、前庭部排水施設を構成している。この2号窯は7世紀末葉～8世紀前葉と考えられている（注2）。

次に燕沢遺跡表採とされている單弁四弁蓮華文軒丸瓦（図31）と比較してみたい。この瓦は圓線などの特徴から多賀城創建に先行する7世紀後葉～8世紀初頭の年代が考えられるものである（注3）。この丸瓦部は凹面に布を敷かない凸型台圧痕を残し、凸面が平行叩きのものである。凸面の平行叩きは二次叩きの可能性もあり、多賀城編年のIA-1b類（二次叩きが平行叩き）に近い特徴をもつ。本遺跡のI類は、多賀城編年のIA-C類（二次叩き→縦位ケズリ）に近い特徴をもつ。從来の調査成果をみると本遺跡1・2・3次調査で一定量出土している。いずれも多賀城跡での出土量は非常に少ないものである。以上のように本遺跡1号住居跡出土丸瓦I類は、多賀城跡IA類と比較して、粘土板巻き無段という共通性をもちつつも異なる点も多い。又、大蓮寺2号窯出土例と比較して近似するが細部の特徴は異なる。この2号窯の丸瓦は長さ37cm前後のものが多いが、これは本遺跡の30cmに比較して長い傾向が認められる。前述の表採された燕沢遺跡軒丸瓦の丸瓦部33.5cm例と合わせて考えてみると、この点で本遺跡I類はやや後出的傾向があるのではないだろうか。

次にII類は粘土紐巻きの無段丸瓦（1点）である。多賀城分類でこれに近いものはII期に属するII-b-a類であるが、これは本遺跡例の凸面がロクロナデである点で異なる。

さて、瓦から見た限り竪穴住居跡の暗渠状遺構設営の年代の決定は困難である。出土土器からすると8世紀後半頃の可能性が高い。丸瓦の製作技法においても、粘土紐巻無段という製作技法の特徴はII期にみられるので、各種の丸瓦が暗渠状遺構に使用された年代はこの頃と考えられる。

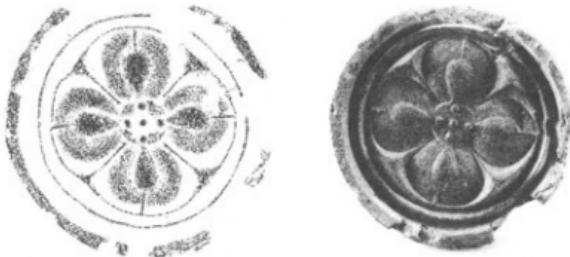


図31 燕沢遺跡出土軒丸瓦（左図 スケール3分）

(注1) 宮城県多賀城跡調査研究所のご好意で実見させていただいた。

(注2) 平成三年度整理途上の見解

(注3) 田中則和・篠原信彦「大蓮寺窯跡」『第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料』(1991年)

2. 5次調査

奈良時代の土坑1基。平安時代の竪穴住居跡2軒・竪穴状遺構1基・土坑1基、時代不明の土坑3基・溝状遺構8基・ピット41個を検出した。

SK2土坑から出土した土師器坏は、国分寺下層式に比定されるもので、燕沢遺跡の調査でははじめて出土したものである。

3. 6次調査

古墳時代塙竈式期の竪穴住居跡1軒が、柱穴状ピットと溝状遺構の配置から想定される。又、平安時代の溝状遺構1条、時期不明の土坑2基・溝状遺構5条、ピット69個を検出した。

引用・参考文献

- 石田茂作 1934 「仏教の初期文化」岩波講座『日本歴史』
- 伊東信雄 1950 「燕澤古瓦出土地」『仙台市史3』
- 1970 「燕澤古瓦出土遺跡」『仙台の文化財』
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 阿部義平 1968 「東国の土師器と須恵器」『帝塚山考古学』
- 桑原滋郎 1969 「ロクロ土師器坏について」『歴史』第39輯 東北史学会
- 渡部弘美 1982 「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第39集
- 1984 「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第62集
- 結城慎一・中富洋 1988 「燕沢遺跡」仙台市文化財調査報告書第116集
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1980 「多賀城跡政府跡（図録編）」
- 1982 「多賀城跡政府跡（本文編）」
- 進藤秋輝・高野芳宏・渡辺伸行 1975 「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要II』宮城県多賀城跡調査研究所
- 進藤秋輝 1978 「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要V』宮城県多賀城跡調査研究所
- 白鳥良… 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所

写 真 図 版



写真一 1 航空写真 昭和36年撮影



写真一 2 航空写真 平成2年撮影



写真-3
4次調査区遠景
(調査前状況)



写真-4
4次調査区近景
(調査前状況)



写真-5
S I-1 堅穴住居跡

4次調査 遺構写真 (1)



写真-6
S I-1 竪穴住居跡
瓦埋設部



写真-7
S I-1 竪穴住居跡
完掘状況



写真-8
S I-1 竪穴住居内
土師器甕埋設部

4次調査遺構写真（2）

写真-9
S I-1 竪穴住居跡 煙道(右)

写真-10 作業風景(下)



写真-11
S B-1 挖立柱建物跡



写真-12
S B-1 挖立柱建物跡



4次調査遺構写真 (3)



写真-13
S B-1 挖立柱建物跡



写真-14
S X-1 平場瓦出土状況

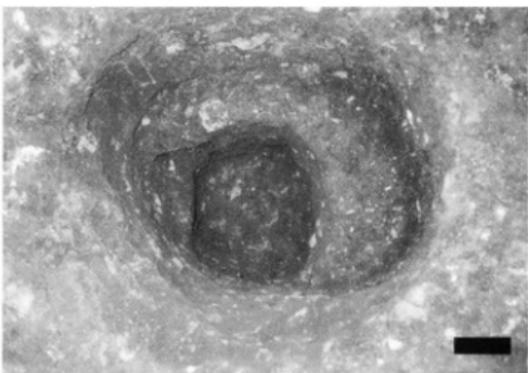


写真-15
S X-1 平場 柱穴

4次調査遺構写真（4）

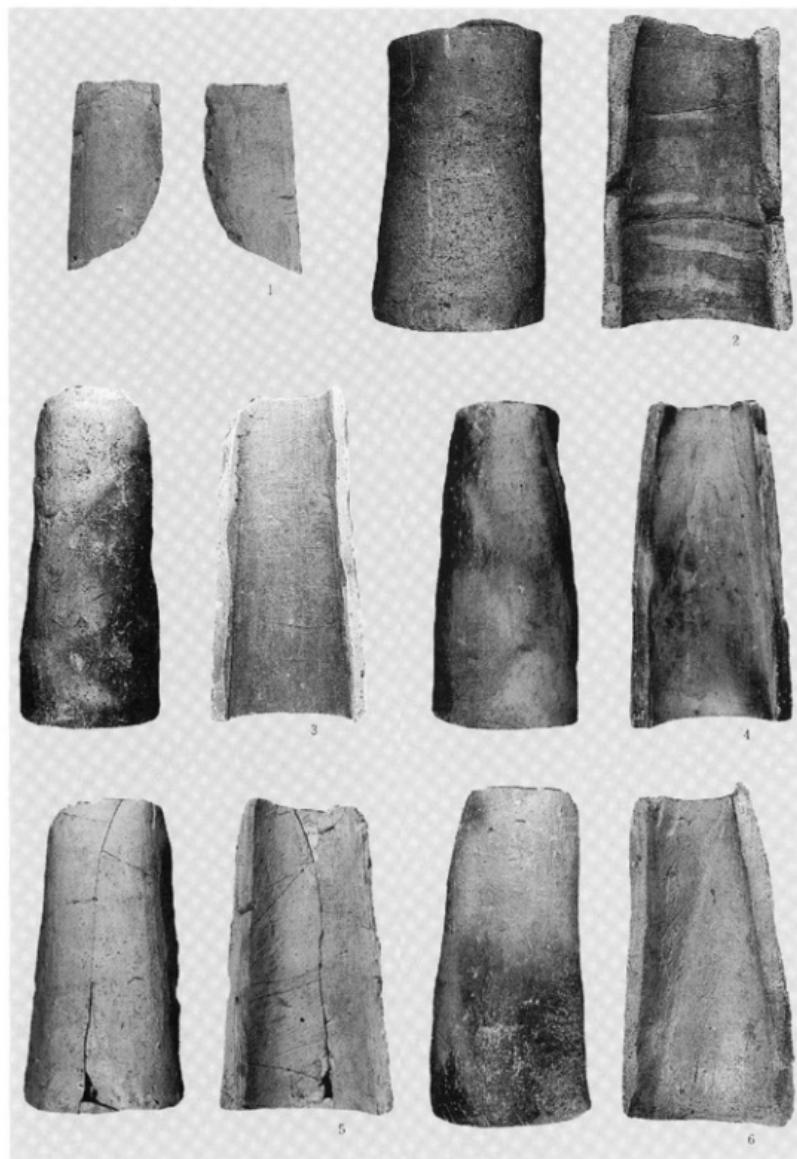


写真-16 4次調査 S I 1 積穴住居跡埋設瓦

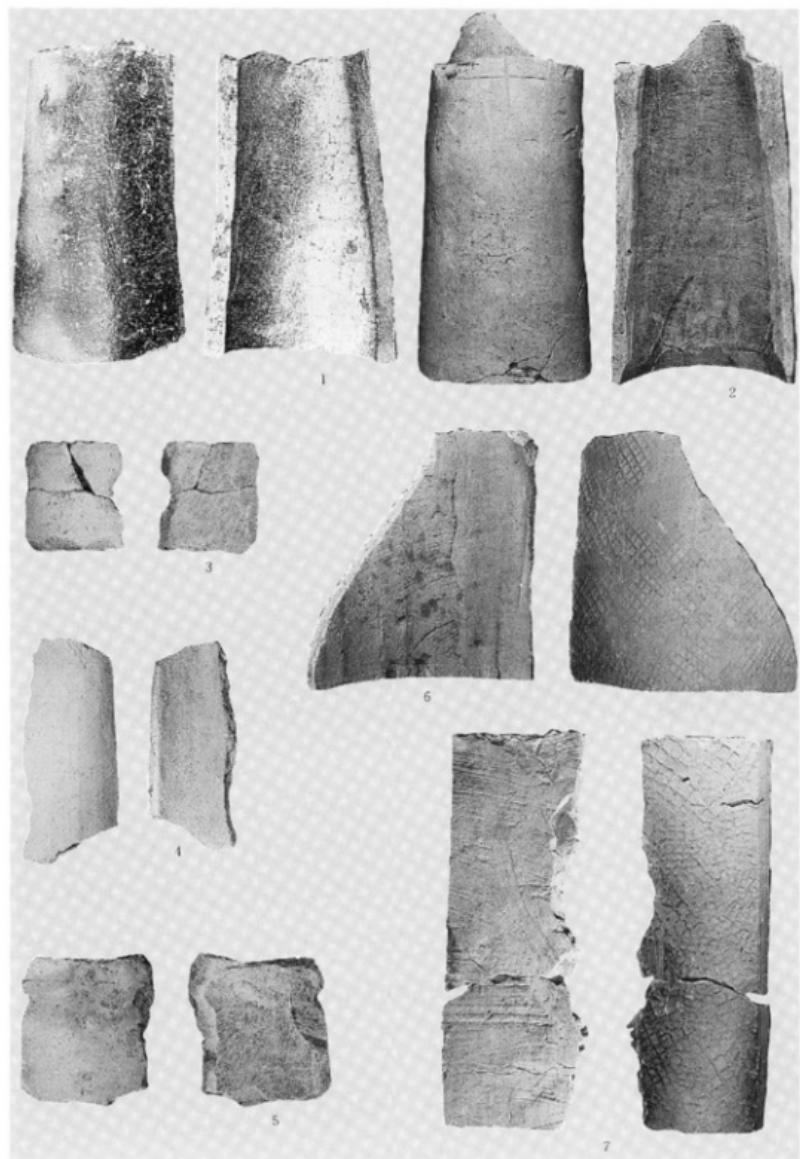


写真17 S I 1 積穴住居跡埋設瓦
S X 1 平場・S B 1 挖立柱建物跡出土瓦

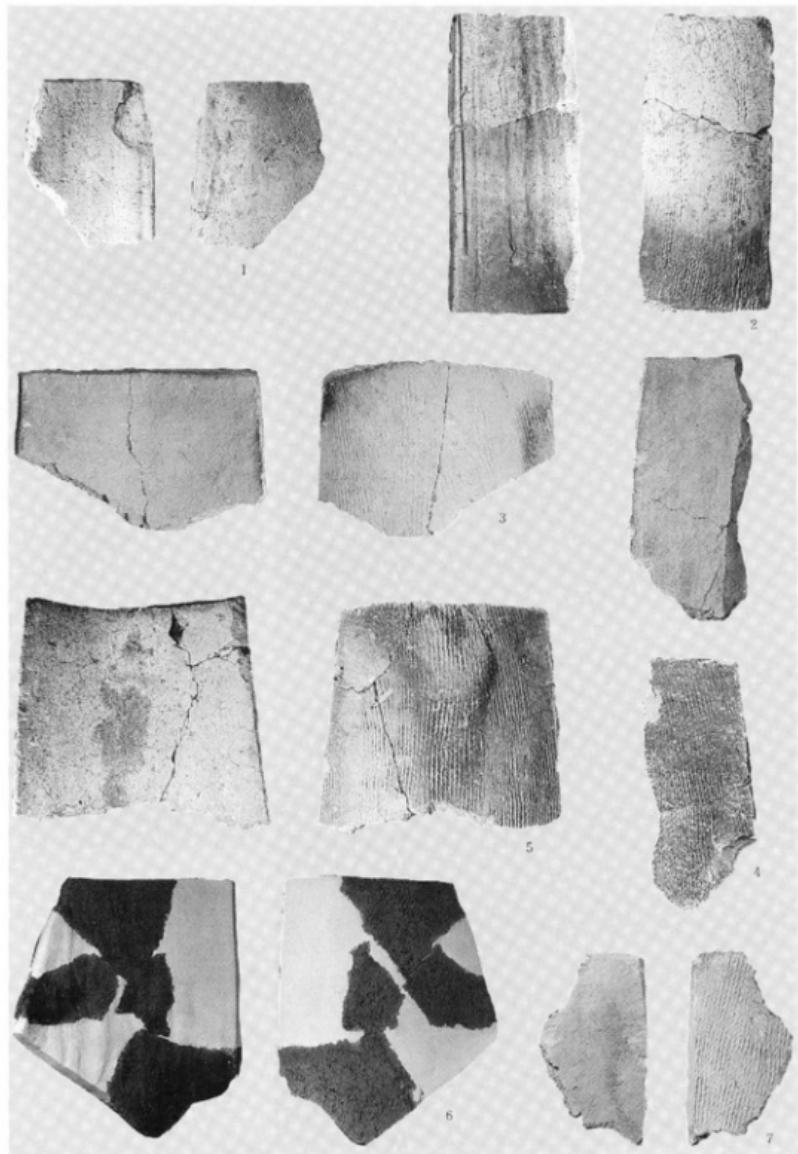


写真-18 SX1平場・SB1掘立柱建物跡出土瓦



1



2



5



3



4

1. S I I 3層下 (図5-1)
2. S B I 3層地ベルト (図10-3)
3. S B I 3層下 (図10-2)
4. S I I P-1 (図10-1)
5. S B I 3層上 (鉄製品)

写真-19 4次調査出土遺物 土器・鉄製品



写真-20
5次調査区遠景(南西から)



写真-21
調査区全景(東から)



写真-22
調査区全景(西から)

5次調査遺構写真 (1)



写真-23
S I - 1 壴穴住居跡



写真-24
S I - 2 壴穴住居跡



写真-25
SK - 1 土坑
土師器坏出土状况

5次調査遺構写真（2）

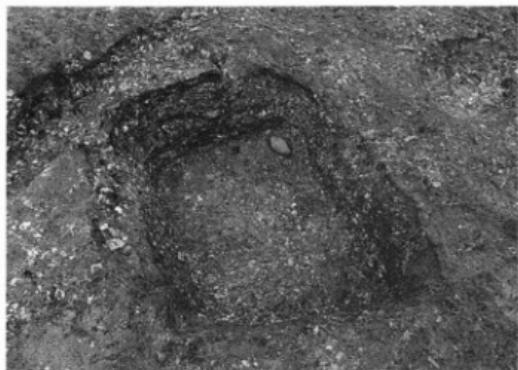


写真-26
SK-1 土坑完掘状況



写真-27
SK-2 土坑



写真-28
SK-2 土坑
土篩器壊出土状況

5次調査遺構写真（3）

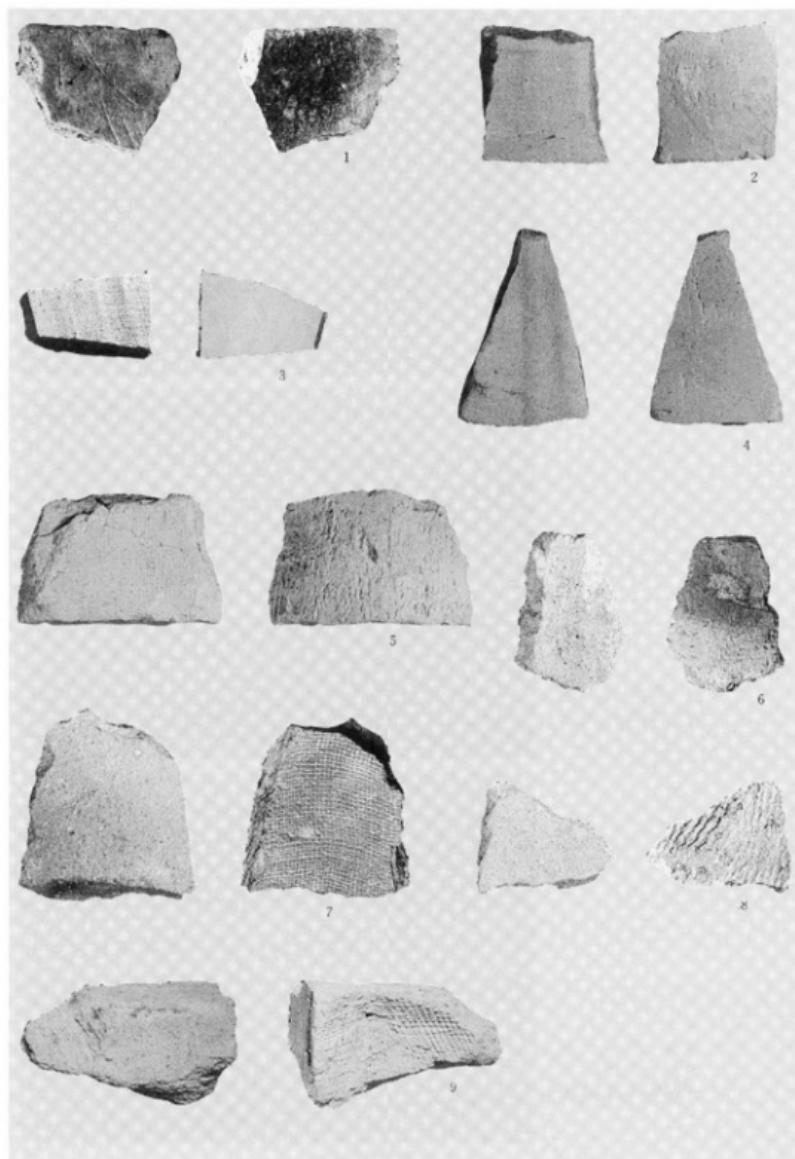


写真-29 SK1 土坑出土瓦

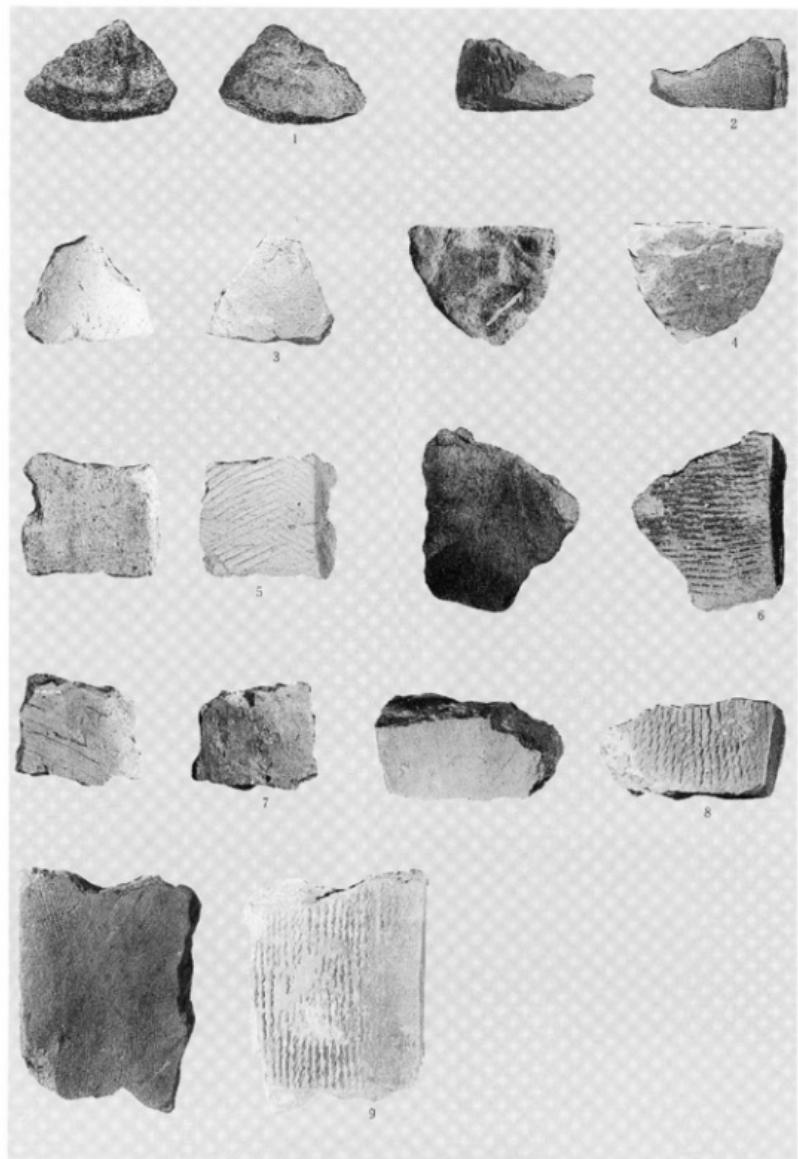
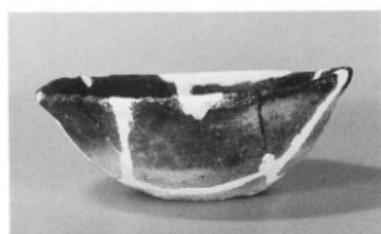
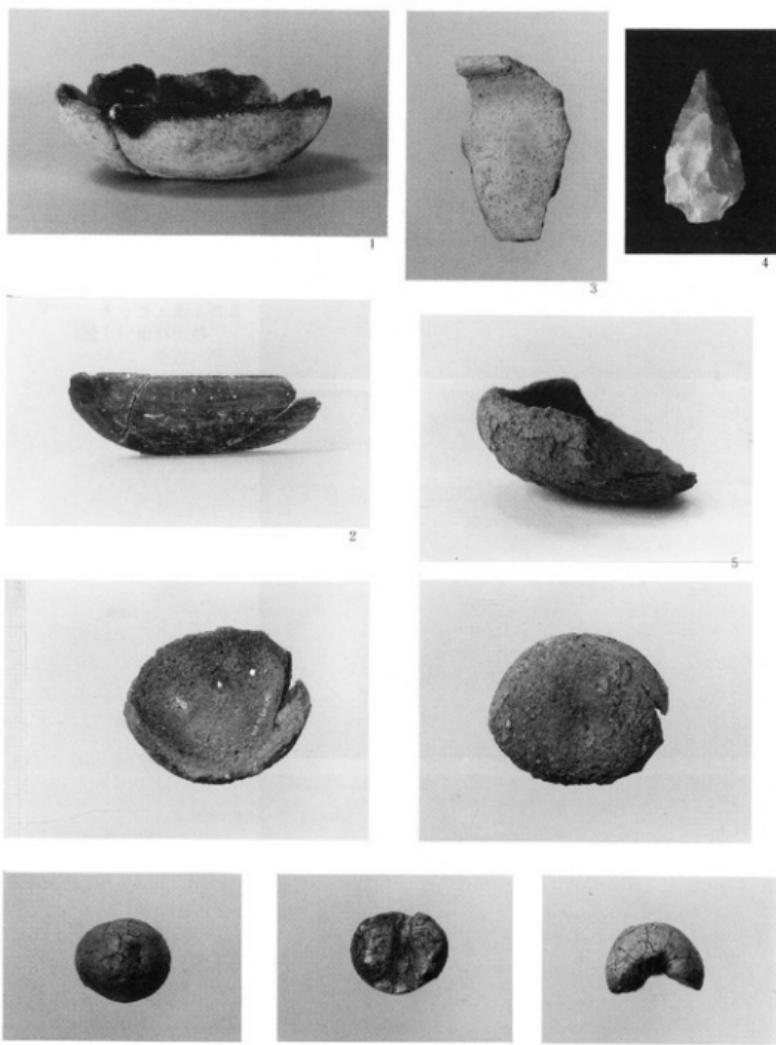


写真-30 5次調査遭構外出土瓦



1. SK1・P-7 (図17-3)
2. SK1・P-9 (図17-7)
3. SK1・P-6 (図17-4)
4. SK1・P-3 (図17-6)
5. SK1. 赤燒土器 (図17-8)
6. SK1. 須惠器 (図17-9)
7. SK1. P-8 (図17-5)
8. SK2. P-1 (図19-3)

写真-31 SK1 土坑出土遺物



5 次調査
 1. SK 2 P-2 (図19-2)
 2. SK 2 埋土 (図19-1)
 3. S I 1 P-1 (図14-2)
 4. SD 5 N.40 (図22-2)

写真-32 5・6次調査出土遺物



写真-33
SD 1満・ピット
検出状況（I区）



写真-34
SD 1満・ピット
完掘状況



写真-35
竪穴住居跡（II区）

文化財課職員録

課長	早坂春一	調査第一係	調査第二係
管理係		係長 佐藤 隆	係長 加藤正範
係長	鶴田義幸	主任 田中則和	主任 熊谷幹男
主事	白幡靖子	教諭 佐藤好一	教諭 太田昭夫
〃	佐藤良文	主任 篠原信彦	主事 佐藤 洋
〃	高橋三也	〃 木村浩二	〃 佐藤甲一
〃	庄司 厚	主事 金森安孝	教諭 小川淳一
		〃 吉岡恭平	主事 渡部弘美
		〃 工藤哲司	〃 主浜光朗
		〃 斎野裕彦	〃 中富 洋
		〃 長島榮一	〃 平間亮輔
		〃 工藤信一郎	教諭 高倉祐一
		〃 荒井 格	主事 佐藤 淳
教諭	五十嵐康洋	〃 渡部 紀	
〃	渡辺雄二		
主事	大江美智代		

仙台市文化財調査報告書第154集

燕沢遺跡

1991年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市四丁町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷機 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 263-1166
